菅原正信教授退官記念誌

弘前大学医療技術短期大学部
理学療法学科同窓会

1989年2月

菅原正信教授御近影

菅原正信教授略歴

大正11年7月2日	岩手県一関市に生まれる
昭和25年3月	東北大学医学部卒業
昭和26年8月	東北大学医学部助手
昭和30年7月	盛岡赤十字病院整形外科医長
昭和31年4月～33年1月	岩手医科大学非常勤講師
昭和33年2月	東北大学医学部講師
昭和34年8月	秋田県太平療育園園長
昭和35年3月	「人工関節置換術に関する実験的研究」により医学博士の学位を授与さる
昭和45年4月	秋田大学教育学部，医学部非常勤講師
昭和47年11月	脳性麻痺の筋力状態表示法の研究に対して高木賞（奨励賞）を授与さる
昭和55年2月	弘前大学医療技術短期大学部教授
4月	弘前大学医学部非常勤講師
昭和56年4月	日本リハビリテーション医学会評議員，同技術教育委員会委員
昭和58年4月	日本整形外科学会認定医
同年同月	日本リハビリテーション医学会認定医
昭和62年4月	弘前学院大学非常勤講師
昭和63年3月	弘前大学医療技術短期大学部教授退官
4月	勝平中央病院院長
10月	外旭川病院院長

目　　次

発刊にあたって

1．菅原教授記念講演 …… 1

2．会員の一言

Ⅰ期生（昭和５７年度卒業）…… 13

Ⅱ期生（昭和５８年度卒業）…… 29

Ⅲ期生（昭和５９年度卒業）…… 45

Ⅳ期生（昭和６０年度卒業）…… 65

Ⅴ期生（昭和６１年度卒業）…… 81

Ⅵ期生（昭和６２年度卒業）…… 103

編　集　後　記

発刊にあたって

弘前大学医療技術短期大学部
理学療法学科同窓会
会長　石　川　　玲

菅原正信教授の定年ご退官に伴う記念誌刊行を会員の皆様と共におよろこび申し上げます。

昭和58年３月に弘前大学医療技術短期大学部理学療法学科同窓会が発足してから５年の歳月が流れました。この間に会員数は６回生までで112名に達し、在学中に学んだリハビリテーションの理念を実践すべく、全国各地で活躍致しております。同窓会発足からの５年を顧み、かつまた、今後の在り方について深く考え、母校と本会の発展に貢献することこそ私共会員の使命であり、その使命を果すことが菅原教授への恩返しであろうと考えて、本誌の刊行と相成りました。

本誌の編纂に当っては、その目的に添うべく、母校での思い出や近況等について広く会員の皆様からご寄稿頂きました。また本年２月に行なわれた菅原教授御退官記念講演会における講演内容をも組み入れました。菅原教授が肢体不自由児の療育に偉大な功績を果されたことは、在学中より会員諸氏もよく感得されていることと思いますが、さらに教育者として、私共に臨床家としての「心」を大切にすることを改めて強調しておられました。

菅原教授におかれましては、ご退官後もリハビリテーション医療に携わっておられ、昭和63年10月からは新たに病院長としてご活躍中であります。菅原教授が臨床の場でご活躍なさっておられることは、我々会員一同にとっての励みであるとともに、今後会員一人一人が更に研鑽に努め、リハビリテーション医療の発展に寄与していかなければならないことを痛感する次第です。

最後に御多忙中御寄稿下さいました諸氏方々に心から感謝申し上げますと共に、編集に携わって下さった諸会員の御苦労を御高察の上、ご一読ご叱正を賜わりますようお願い申し上げ、発刊のご挨拶と致します。（1988.10.9）

菅原教授記念講演

21世紀の理学療法士に望むもの

今日はこういう機会をつくって頂いたことに、心から感謝申し上げます。遠いところをわざわざ来てくださった方、あるいは何か面白いことを話してくれるんではないかと期待してきてくださった方々に対して、「何だ！つまらなかった」と思われるかもしれません。しかし、顔を合わせていろいろ話し合えると言うことを思いますと、それを勘弁して頂いて、しばらくの間、話を聞いていただければ幸いだと思っております。いま会長が話されたように、私が退官するためにわざわざ集まっていただいたという形になりました。心からお詫び方々お礼申し上げます。

私がこの席に立ってお話できるようになったのも、実は私の兄が私の面倒をみてくれたからです。私と兄とは13程年が離れていました。従って私が中学校に入った頃にはもう既に兄は医者になって、自分の郷里で開業していたことになります。故、私とは毎日顔を合わせていました。

私の家はそれほど裕福ではなく、親父が借金をしながら兄貴を学校に通わせていました。当時、医者になるためには中学卒業後すぐ医学専門学校の4年制に入るか、旧制の高等学校を出てから医学部4年の計7年かかる過程のどちらかでした。官立と私立では自ずからお金のかかり方が違います。当時の官立の医学専門学校というのは、京城にある京城帝国大学附属医学専門学校と台湾の台北帝国大学附属医学専門学校の2校だけで、内地では5年制の大阪医学専門学校しかなく、その他は皆私立の専門学校ということで、お金のかかり方がかなり違いました。彼は中学校を卒業する年齢ですから（当時18歳)、どういう説得をしたのか知りませんが、その18の子供がしょっぱい海を渡り台北にいって勉強する事は、岩手県一関町（そのころはまだ市になっていませんでした）の中学校としては破天荒なことでした。当時は船で一週間ほどかかったと聞いています。何故そんなところへ行ったのかというと、お金がかからないというばかりではなく、彼には一つの夢がありました。その夢というのは、野口英世に非常に傾倒していたために、熱帯医学を勉強したいというのが心の奥底にあったからのようです。

中学校卒業当時、そういう事を考えるということは、今の時代の人との間にずいぶん隔たりがあったと思います。父は給料生活者で家にはありあまるお金もないのに、金を続けてもらう親を説得して海外に出かけて行って勉強する、しかも熱帯医学というものをどうしてもやりたいという熱烈な希望があったのでした。

しかし残念なことに、彼の目的は学校を卒業すると同時に微塵にも砕かれ、郷里へ帰ることを余儀なくされました。それは、金を送る術がもう既に尽きてしまったということにありました。後は自分で何とかしてくれと親からいわれて、思いを遂げずに帰ってきたのでした。

そこで、彼は岩手医学専門学校の外科の教室に入って少し勉強を続けました。ところが、たまたまそこの教授が一身上の都合で辞められて郷里に帰らなければならない事情がおこったのでした。そのため教室もその先生と一緒に辞めて、その先生の口利きで千葉県成田市の病院に勤務することになりました。その後結局開業をすることになり家に帰ってきたのは、私が中学一年生の時でした。

若い頃の私は変わり者で、色々なことをやってみたいと感じていました。当時、新しくできた満州帝国……この間『最後の皇帝』というのが映画になっていましたが……その満州帝国が出来た時に、そこで少し暴れてみたいという考えを持っていたのでした。しかし、たまたま世の中が戦争一色に塗りつぶされた時代になってしまいました。

「おまえなんかは勉強しているよりも弾丸が飛んでくるのを防ぐ道具で結構だ」ということで、学徒出陣に駆り出され、たまたま最後には特攻隊に配属になりました。その特攻隊も一機一艦のような形でなくて、土佐湾に上陸する舟艇に突っ込めば、一人で何十人も殺せるだろうということで、土佐湾に上陸する敵の上陸用舟艇にぶつかっていけという命令が下って、金比羅さんのすぐ下の方にある観音寺航空隊に行きました。しかし、敵は、土佐湾に上陸する前に沖縄に上陸し原爆が投下されて、日本は「まいった」ということになり、幸か不幸か、こんなことを言うと怒られますけど、幸せにも生きて家に帰れました。

終戦当時の話ですので、今よりももっと就職難で、特に何の知識や技能も持っていない私でしたから、誰も雇ってくれるところがなく、悶々とした日々を送っていました。そこで、兄が、「どうせこうなった世の中だから、もう一度勉強してはどうか」と言ってくれたおかげで、もう一度勉強できることになり、現在の私がいるわけです。

その兄が、昭和57年に腸閉塞症状で入院したのでした。入院した兄のところに行ったら、ちょうど私の中学校の後輩が主治医になっておられました。「実は困ったんだよ、お兄さんの身体はもう癌細胞でいっぱいだよ」と打ち明けられました。ちょうど小腸から大腸に移ると、上行結腸として上の方に、それから横行結腸として横の方に向かい、下に下がって下行結腸、それからＳ字状結腸になり直腸肛門につながっています。この大腸の作用は、いままで消化したものを最後に締めくくるところとして、老廃物を完全圧縮して栄養分を吸い取る働きをします。ここんところ

の、下行結腸からＳ字状結腸に移行するところに癌ができて、それで通過障害を起こしてしまい、結局下から出ませんで上から出る状態となり、全部吐いてしまうという症状が起こっていました。もちろん、腸間膜、あるいは腹膜を刺激しますから、非常に強い腹痛を訴えてもいました。更に、肝臓にも転移していて、もちろん腹膜……癌性腹膜炎を起こして腹水もいっぱい貯っているといった状態で、 inoperabel ーいわゆる手術したって意味がないという状態でした。ただ、生命を長引かせるためには、人工肛門造成術を施行し、人工肛門で癌腫瘍の出ている先の方で全部外に出して、余命を延ばそうということで、人工肛門を造ることを勧めているんだけども、『俺はそんな末期癌ではない』と、どうしても言うことを聞かない。『手術はいやだ』って、言うことを聞かないので参ってたんだと、主治医に言われました。

兄も一応医者の端くれだし、データを全部見せて、そして納得してもらうより仕様がないんじゃないかと、今までのデータを全部兄に見せました。そうしたら、素直に「それじゃあ手術を受けよう」と言い、手術を受けてくれました。その後人工肛門造成術なんてのは、そんなに長い間寝てなくていいわけですから、一週間ぐらいたって、退院して、それからも、自分の使命だということで、患者を診ることは死ぬまでずっと続けていました。

そして、その兄がある時私に「自分で診断をして、そうだろうとは思っていたけれども、さすがに、いざ全部さらけ出された時の気持ちはショックだった」と言いました。手術前には、嘘であって欲しい、自分の診断が誤診であって欲しい、自分は過大に診断してしまったので本当はなんでもなく、例えば、ただ単に腸管麻痺のような状態が起こり腸重積（腸と腸がはまり込んでしまうことを腸重積という表現を使います。）となったものであって欲しいという一縷の望みを持っていました。しかし、実際すべてのデータを出され、ＣＴスキャンなんかを見せられた時には、「あー、本当だったのか、やっぱりそうだったのか」と、かなりショックだったという話をしてくれたのです。

ちょうど寒い時期にその最後の状態が起こってきたので、窓からみている雪の舞う姿それ自体が、ちょうど兄の心の葛藤というものをそのまま表しているように感じていました。ある時には真直ぐに降ってくる雪、ある時には横殴りに流れて来る雪、はたまた波が逆巻くような形で雪が渦を巻いている状態……そんな姿の雪の降っている状態と同じように兄の心の中というものが、複雑で辛いものだったのでしょう。そういうことを何とはなしに私に、とつとつと力ない声で、話してくれた兄の気持ちを考えた時に、心と心の闘いが大変だったろうと感じたわけです。

ところが、死に直面しなくとも、私達の生活の中には、少なくともそういう状態がかなり多くの回数で押し寄せて来ることがあります。何もかも自分の思うように

なるということもありますが、そればっかりではありません。やっぱり、思うようにならないこともいっぱい出てきます。これは、人間と人間が住んでいる社会であるからこそ、そういうことが起こってくるわけで、自分が一人で生活するのであれば、そんなことは起こってこないかも知れません。しかし、現実として、自分が一人で住んでいくということになってきますと、それは大変なことです。とてもじゃないが自分が一人で生活するなんてできることではないと思います。ロビンソン・クルーソーなんていうような漂流記……あれは一つの創った話であって、本当に誰もいない一人ぼっちの社会なんてものは、よほど精神力が強くなければ生き続けられないんじゃないかというものが、私の心の中にもありました。私にとってのそれは、いままで太平療育園の子供達と毎日遊んだり、あるいは子供達に教えられたりして過ごしてきた中から、ある日突然に、弘前大学の医療技術短期大学部に理学療法学科・作業療法学科を作るから来て手伝ってくれ、ということでした。色々の悩みがありましたが、それらを断ち切って、みんなと会える喜びに燃えたというのが本当だと思います。

私は、ＰＴ・ＯＴに療育を手伝って欲しいと思いながらも、どうしてもそういう人達を得ることが出来ない事情で長い間苦しんでいましたので、みんなと一緒に、少なくとも他のＰＴよりもすばらしいＰＴをつくっていきたいという考えで、喜び勇んで来たわけです。しかし、ちょうど赴任した時は、２月16日が辞令交付日だったんですが、何かにと長い間あちらにいたものですから、あっちからこっちから送別会やらなにやらで、なかなかこっちに赴任することができなくて、結局落ち着いて赴任したのが３月間近になってからでした。

ところが、来てみたら知っている人は誰もいません。今は仙台に開業されている放射線学科の伊藤とし先生が、わずかに私のことを知っていて下さって、いろいろ慰めてくれたぐらいでした。朝、出勤して出勤簿にはんこを押して、「おはよう」と事務の人達に挨拶して自分の部屋に入ると、そこには誰もいません。また、間借りしていた部屋に帰っていき、「ただいま」といっても、「お帰りなさい」と言ってくれる人は誰もいませんでした。そういう生活では、誰とも話というものが出来ません。テレビをかけたって一方通行、こっちから話しかけたって相手は答えてくれません。そういう生活は、精神的にも非常に人間を歪めていくと感じました。

そういうわけで、人間が一人で住むということは ― もちろん今は精神的な側面からですが ― それに衣食住が関わってくる以上、自分が食べるものを自分が取ってくるという原始的な生活は、現在出来るはずもありません。そうすると、お米を作ってくれる人がいるからこそお米が食べられるし、野菜を作ってくれる人がいるからこそ野菜が食べられるし、お魚を取ってきてくれる人がいるからお店でお魚が買

えるのです。つまり、何かにつけても、すべて一人の生活じゃなくて、多くの人達の力を借りて生活しているというのが現状だということになります。

そういうことで、一人身というようなことは決して出来るわけじゃない、ということを考えると、仕事においても到底一人で仕事をしていくことはできないのです。そこに、つまり、医療スタッフという名前が出てきます。そして、その人達とのコミュニケーションがなければ、うまい仕事が出来ないということも起こってくるのです。リハビリテーションというものは、そういう意味では一人だけの仕事じゃなくて、チームアプローチだということなのです。先ほど会長が、“リハビリテーション医学Ⅰ”（注：菅原教授の講義）で聞いたという話はまことに持ってその通りで、一番基本になるものを忘れて技術に走り、人を一生懸命動かしたところで、決して予期する効果というものが起こるわけがないのです。なぜならば、かつて健康であった人が、365日の毎日をどれだけの運動量で過ごしていたか、それから病院に入って一時間の訓練時間の後、病室に帰った人がどんなことをしているのかを考えますと、健康でいた時可動していた時間、あるいは量的なものとを比べますと、百分の一にも満たないものであります。そうすれば、患者を何とかして多く動かそうとするためには、病室に行った時に、「こういうことをしなければいけませんよ」と指示したとしても、患者は病室に帰ってくれば“デン”とベッドにひっくり返ったりしていることが多いのです。そこでやっぱり看護婦の力を借りなければいけません。看護婦に「こういうことがこの患者には必要なので、何とかして、病室にいる時に気を配って下さい。こういうことをやっている時は誉めてあげて下さい。患者が寝ている時には起こして、何とか病室内での訓練をやるように注意して下さい。」と協力をしてもらわなければいけません。こういうことをやっていかないと、百分の一の動きで機能が改善されるわけではないし、機能が維持されるわけでもないということは、火を見るより明らかです。

そういう意味では、リハビリテーション……リハビリテーション医療それ自体が、チームアプローチであるということを実際、職場にいてつくづく感じていらっしゃると思います。ただ、その協力体制が出来ないということをもしおっしゃるとするならば、そこに自分の姿をもう一度振り返ってみなければいけないと思います。人間の心というものはお互いに鏡のようなもので、相手の姿が自分の鏡の中に映し出されてくるものです。人間は感情の動物ですので、やはり相手の姿が自分の鏡の中に映った時に「こいつは汚い奴だな」と思えば、決して笑顔をもってお互いに話なんかは出来なくなってしまうと思うのです。だから、今日も２、３の人とお会いして、「どう、笑わせてるか？」というと、「私はそういうひょうきん者じゃないから、それほどのことは出来ません」というような話が返ってきた時に、些かこう……寂

しい気を感じたんですけど……。やはり私は、どんな名ＰＴであっても、人間性を失ってしまっては、ＰＴとしての資格はないような感じがいたします。やはり、人間くさい、本当に人を愛せるだけのＰＴでなければ、私は本当のＰＴだとは思えないような感じがいたします。

私達が肢体不自由児施設に入り込んだ時に、信念・理念はこういうものだと、高木先生が療育の理念というものを打ち出しました。しかし、高木の療育というものは時代の推移と共に遠のいて行っています。高木先生の言葉の中に、不治永患児－「治らない、永らく患う子供」とあって、これは療育の対象にならないとはっきり療育理念で唱っています。従って、将来社会の一員として活躍できるような子供を治療し、教育を与えることが療育であり、どうにもならない子供には療育はないという概念をかつて打ち立てられたのが、高木療育でありました。しかし、この１月16・17日に大洗のかもめ荘というところで、東日本療育リハビリテーション懇話会が行われるから是非参加しろということで、私も出かけて行きました。そこで、初日に療育理念が話し合われて、次の日には今後の肢体不自由、あるいは障害者といった人達をどのようにもっていったらいいのかを討論する会に参加したわけです。奇しくも、その高木憲次先生がお話になられた療育という問題を取り上げて、現代の療育理念と過去の療育理念との間に大きな開きが出てきたんじゃないかというようなことが話し合われました。つまり、「重症心身障害児であっても、療育は出来ないことはないんじゃないか、重症心身障害児の一日の行動を見ているうちに、あるいは毎日の行動を見ているうちに、何かしらの変化が出てきますが、それを見逃すことはできないんでないか。」ということが話されました。そして、そういったことを考えるのならば、重症心身障害児であっても、療育を考えてもいいんじゃないかという話が出てきて、高木理論と現代のそれとの違いというものが討論されました。なに、今更療育なんてことでバカな討論だと感じる人があるかも知れません。しかし、時代の推移を自分達が確認することが大きな問題なのです。

過去、大正時代というと解らない人があるかも知れませんけども、明治は45年まであって、大正はわずか15年までしかありませんでした。大正天皇はお身体がお弱くて、15年の御在位期間しかありませんでした。その大正年間に、高木先生は肢体不自由児に心を馳せられ、将来日本の国を背負って立つべき人を身体が悪いから、手が悪いから、足が悪いからというようなことで、社会に参加できないようにしてはいけないと打ち出しました。つまり、そういう人たちを立派に社会に貢献させるべきだということを提唱しはじめて、大正の年間から、いろいろとものを考えてこられたわけです。

日本の国も、昭和20年の第二次世界大戦で敗戦してからまるっきりその方向が変

わってしまいました。日本の歴史というものも何かしら薄っぺらい形になってしまい、更に、いままで隠していたことが暴露されるようになって、何かしら一皮むけた日本になってきたと思います。今日もテレビで、2.26事件が解説されていました。2.26事件というのは、軍部の圧政を正規のものに返そうとして、青年将校達が日本を改革するための“決起”を行い、国に対して反乱をしたという事件です。そして、反乱軍として処刑された青年将校達について、「本当のあいつはこうなんだ」ということを、一人の小説家が一生の仕事としてその資料を集めて、今日のテレビで話していました。いずれにしろ、そういうことが正しいこととして、あるいは正しくないこととして伝えられていたなどと、盛んに言うような時代になってきたようです。

一人の先生が一生懸命になって肢体不自由児のことを考え、そういう体系を作った時のものの考え方というようなものと、現代のものの考え方は、かなり変わってきているわけです。私達の仕事の内容の中にも、脳性麻痺は早期発見・早期治療が必要で、しかも、ボバース法・ボイタ法を使えば、神経発達段階で正常化することが出来るということを夢中になって唱え、神がかり的にそういうことを一生懸命努力された先生方もいらっしゃいます。しかし、ボバース・ボイタが言っている言葉と日本人の考えている言葉とは、かなり裏腹な違いがありまして、耳学問的に日本人が造り上げた事柄が多いようです。実際の現状を理解してこれらの文献を読み理解するようになってくれば、それはちょっと間違った考え方だということが解るはずです。彼らは決して脳性麻痺の治療ということを一言も言っていなくて、運動発達遅延という言葉を使っているのです。それは、小さい時には differenzieren が出来ないので（脳性麻痺と知能の発達の遅れをはっきりと区別することが出来ないために)、脳性麻痺と知能の発達の遅れなどの子供達を運動発達遅延という言葉を使って、これらの子供達を何とか軌道にのせた状態にもっていこうとしたのが彼らの訓練方法でした。

ボバース法は、赤ちゃんの扱い方を十分注意して、緊張、過緊張状態に持っていかないようにすることが基本ですし、これに対してボイタ法は、基本的な運動を早く発達させることが大きな狙いだということです。双方のものの考え方というより子どもの扱い方が非常に違っているということで、片方では「ボイタがいいんだ」とか、片方では「やっぱりボバースがいいんだ」と、日本の国が治療法で真二つに分かれた時代もありました。しかし、だんだんとものの見方が深まってくるに従って、随分ボイタ法・ボバース法などに対するものの考え方が違ってきたような感じがいたします。もちろん、その間というものには、20数年の歴史がありますので、初期にボイタ法・ボバース法を受けた子供達は、もう既に成人に達しています。そ

うい う点から考えますと、時代の推移というものは、かなり色々なものを色々な見方で変えていきますし、そういったことを考えていかなければいけないと思います。

私もその時の推移を経て65歳で退官の年を迎えたのですけれども、1922年から生を受けてずっとこう生きてきているのです。今、1988年になっています。あと12年経つと1900年代は変わって2000年代に入り、これを21世紀という表現をしますが、あながち私も21世紀まで長生きできない年でもないと思っています。今晩当り酒を少し慎めば、まだまだ21世紀まで長生きできるのではなかろうか……とこう考えているわけです。しかし、その時に「菅原からこんなことを習ってきたんだ。菅原先生はこんなことを言ったんだ。」と偉そうに21世紀にテーブルを叩いて叫んだって、誰もおそらく本気にしないと思います。そのように、時代の流れの中には、あらゆる先生達の真理が生き続けているかどうかということは、私達には決して予測できるものではありません。しかし、時が過ぎることは、一人ずつ各々大きくー身体は大きくならないでしょうが、心持ちが大きくなっていくと思います。そして、その時に自分らしいものの考え方を作り出せるような人間になっていかないと、後からくる人達に指導するということが出来なくなってしまいます。例えば、ライセンスを取ってから今年で５年になる人もいるし、まだ１年しか経っていない人もいます。しかし、自分達が自分達の職場において何かをしなければならないということは、気持ちの上ではみんな同じだと思います。しかし、段々段々年が経って、あと10年も経ってしまうと、その時に「あの時はこんなことに夢中になっていたんだけれども、今はこんなことを考えるようになった。こういう方法も自分で考え出している。」ということも言えるようになってくると思います。これが進歩だと思うわけで、「いやぁー学校を出た時からさっぱり変わらないでね、人と相対するのは面白いけれども、やっぱりやることはさっぱり変わりありませんよ。」ということであれば何にも進歩がなく、退化しているだけに過ぎないことになってしまいます。自分一人だけだったらいいのですが、私達には患者が存在しますし、周りには同僚も存在します。これらを考えますと、進歩しないということは、寂しいことになってきます。そういう意味合いを考えると、何とかして自分が何かを求めていくということをしなければなりません。しかし、あんまりのりすぎて、２，３の症例をみてこうだから、これはこういうものであると断定するような発表をしたり、ものを書いたりすると、それが後になって、「あいつはでたらめ……適当な奴だ」という批判を受けざるを得ないということになってきます。従って、ものをいい、ものを考えるということは、あんまり先を焦ってはいけないと思います。その例が根拠になるのであれば、信頼性が高くなってくると考えられるのは当り前のことで、あんまり焦っていい格好をしようなんてことは、決してためになることはなくて、むしろ自分

をなんとなく虚飾に追い込むことになると思います。

今の世の中は倒産だとかなんだとかが非常に多く、日常茶飯事のようですが、その倒産を何とか逃れるために「自分達の会社の収支がこのようによくいっていますよ」などと新聞なんかを賑わしていたいわゆる虚飾という言葉があります。自分を綺麗に見せようと、乙女心でいい人を見つけるためには、“お化粧”をしても罪にはならないと思います。しかし、自分の心を化粧するということは一番悪いことであって、自分の心は常に人間らしい、本当の人間らしい心を持っていないと、患者に対して非常に冒瀆的になってくると思います。また、もちろんそういう心を化粧している人の話なんかは、患者は言うことを聞いてくれないということが当然起こってくると思います。そういう意味合いから考えてみると、余り焦るということをしないで、着実に一歩一歩踏みしめながら歩んでいって、そして、相手に対しての心の思いやりを忘れずに、自分の心を打ち明けてやることが大切です。

私の歌の中の一つに、「大口を開けて、苦しみをこの口にいれる。一緒に苦しみを分け合うぞと患者の前に立つんだ。その気持ちがなければ我々の仕事は出来ないんだ。」という歌があります。やはり自分が患者に対してこういう気持ちを持っているんだよということを伝えなければなりません。そして、患者の心が何を一番要求しているのか、何を望んでいるのかを察知し、あるいは望んでいることを導き出してこそＰＴとしての喜びもあり、ＰＴとしての仕事のやり甲斐があるのではないかと私は感じています。

おそらくいろいろと社会情勢も変わってくるでしょうから、ＰＴの職務も色々な方面に発展していくと思います。そして、21世紀になった時に、やはり慌てないでじっくり歩み続け、自分で何かを考え、何かをしていくのであれば、21世紀に生きる立派で価値あるＰＴになれるのではなかろうかと私は考えております。更にお願いしたいことは、やはり、人間性を失わないＰＴになって欲しい、技術だけに頼って相手を考えないようなＰＴにならないで欲しいということです。やはり、相手の心を暖かく包みながら、そして、自分がより良い方法を持って患者の機能を改善することが大切です。残念なことに、脳・中枢の変化によってどうしようもない、改善することが出来ないという姿を残すことになってくれば、当然何かを考えなければいけません。それは工夫なのです。余談になりますが、最近のある帯ドラマの中で、戦争中の話ですが、「工夫が足らん」と言うものがあり、“工”を取れば、「夫が足らん」と言うことになります。今や日本は、工夫が足らんという標語があったら、工夫の工を取れば今の世の中にぴったりである。その当時、男はみんな兵隊になり、「夫が足らん」ということになるという話が帯ドラマの中に出てきてましたが、やはり、工夫というものがかなり必要になってきます。ボイタ法もいいでしょ

う。ボバース法もいいでしょう。ＰＮＦもいいでしょう。ストレッチングもいいでしょう。ただ、それはその人にあったやり方でやっていくという見境がなければ、何も意味がありません。そして、どうしてもどうしても機能を回復することが出来ないような中枢の障害があった場合には、やっぱり利かない手をどのようにすれば何かの役に立つという工夫を凝らしてあげなければいけません。あるいは、利かない手は捨て去って、利いている手をどのように使うかという工夫をすることも非常に大切になってくるのです。そこで、はじめて独創的な頭の使い方が出てくるということになってきます。今、実際に仕事をしていて、教科書に書いてあったことがばかにためになったとすればおかしい話で、教科書等というのは実際面では何の役にも立たないと思います。ただ教科書というのは、そういう基本的なことが書いてあるだけで、必要なことは、そこから発展していく工夫が、人間の独創性を造り出すということなのです。ですから、単に真似事だけを続けていても自分の喜びにはならないと思いますし、患者の機能の改善を考えれば、当然めだった進歩というものがありません。もちろん、私達の仕事の中で機能が改善したとするならば、それは患者自身が一生懸命努力して患者自身で改善していったということであって、我々は応援旗を振って声高らかに「頑張れ！頑張れ！」と叫んでいるにすぎないのです。もし錯覚を起こして、自分が「機能を改善したんだ」などということを考えるのだったら、ちょっと考え方を変えなければいけないと、そんなふうに私は思います。

21世紀になれば、貴方達も中堅として立派なＰＴになっているはずです。そして、新しくＰＴになってくる人たちの指導をしなければいけません。何回も言うようですけれども、時代の推移と共に人間の心それ自体というものもかなり変わってくると思います。そういう後輩達をうまく育てていくためには、やはり知識も大切ですけれども、その知識を利用してうまく工夫した……その創造性、そういうものが非常に要求されると、私はそう感じています。従って、これから色々なことがやってくるかと思いますし、一番先にいったように人間の心の中はいつも吹雪が吹いているような感じで、辛いことも多々あると思います。ただその吹雪を冷たいものと感じないで、可憐なバレリーナが自分の心の中で盛んに舞台いっぱいになって踊っていると考えて下さい。そして、「じゃあ私がそのコンダクターになって、もう少しその踊りを整理してみよう。」といった考えを持つと、自分が非常に悩んでいることが解消されていくんではなかろうかと感じています。

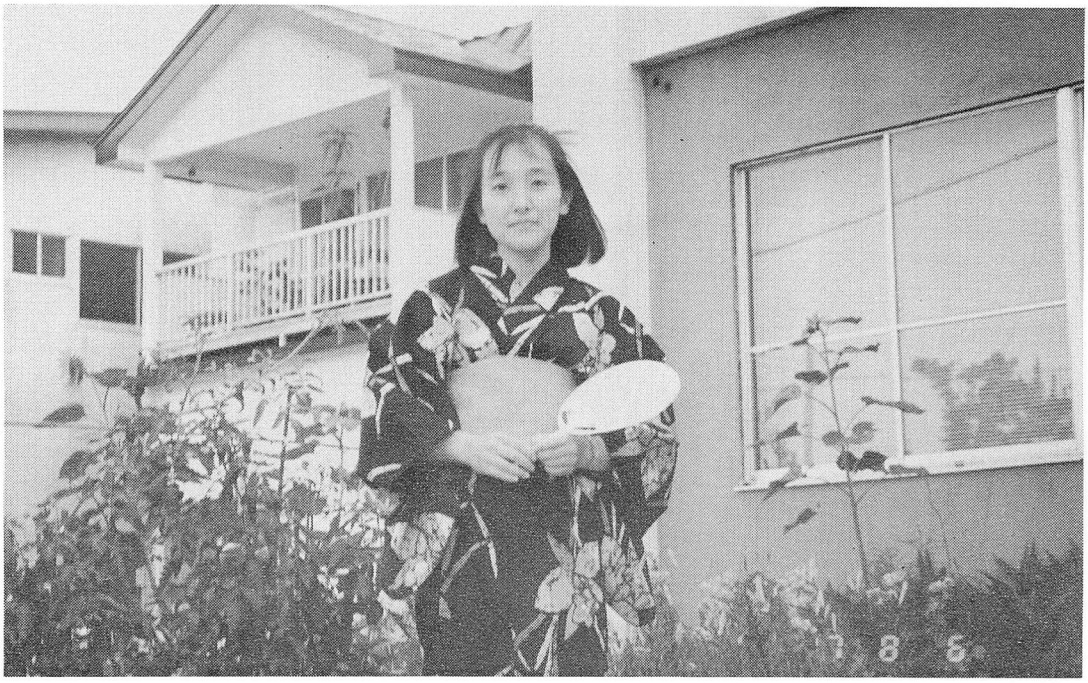
亡くなった、私を大切にしてくれて今日まで育ててくれた兄が、かつて心の中で非常に悩んだことを私自身も体験しました。そして、これから皆さんが、少しでも立派になって欲しくて、あるいは自分で満足するようなＰＴの生活を送って欲しく

て……。そんな感じで、貴重な時間を費やして下さった皆さんに、こういったお話をして私の責を果たすということになるんですけれども、あまりにもお粗末なお話で申しわけなかったと思います。しかし、親として、あるいは教師として、これからの皆さんの努力と、そして成功を心から願う一存でこんな話を致しました。非常に申しわけなかったと思いますけれども、御静聴を心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

菅原正信教授を囲む会　昭和63年２月27日　於　南田温泉 アップルランド

I　期　生

石井照子（所属：東北厚生年金病院）

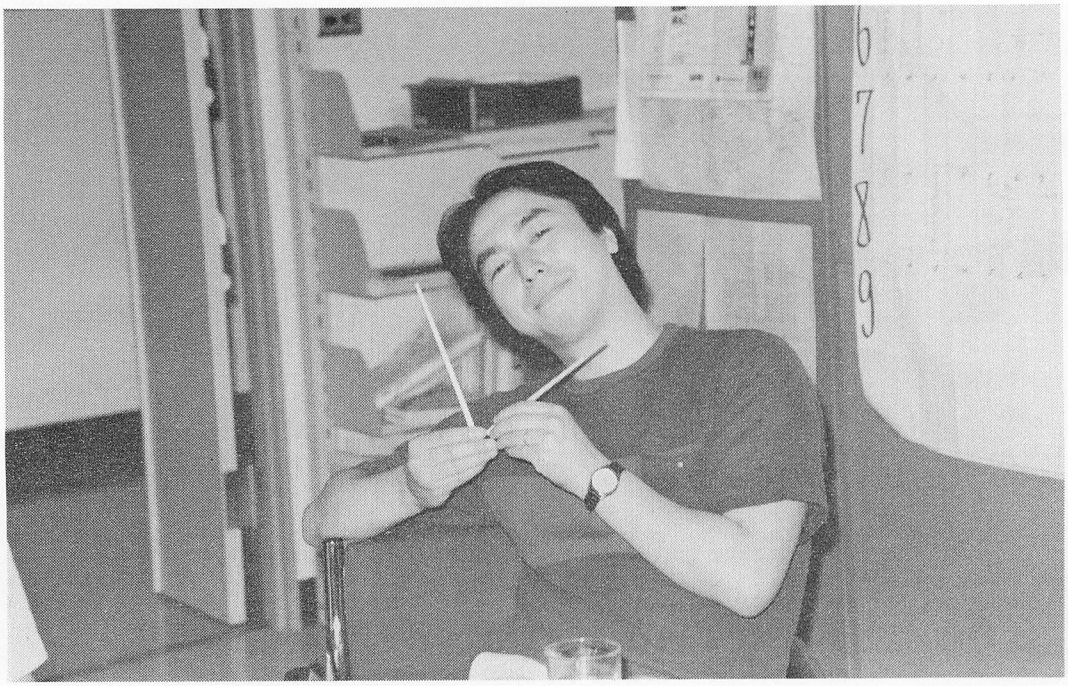


医短を卒業し、仙台の東北厚生年金病院に勤務し、はや5年が過ぎようとしています。まだまだ勉強しなければいけないことが多々あり、医短時代にもう少し勉強しておけばよかったと反省し、一方で机上の勉強だけでは身につかないと考えます。

ところで、カナヅチの私は3年前からスイミングスクールに通ってます。バタ足から始まり、背泳、クロール、平泳ぎとなんとか25mを途中立つこともなく泳げるようになり、スクールに通うのが楽しみになってます。

このように仕事、スイミングなど毎日あわただしく過ごしておりますが、これといった親しい男性はまだいません。そんな男性ができましたら、菅原先生にすぐお知らせしたいと思います。それでは、菅原先生も健康に配慮してお過ごし下さい。

石川　玲（所属：国立療養所岩木病院）



昭和62年４月に現在の病院に赴任して以来、ターミナルケアーにおける医療従事者としての資質について考えることが多くなりました。進行性筋ジストロフィー症患者と接する時、既に私自身もターミナルケアーの真っ只中に存在しており、自分の人間性が常に問われているのだということを強く感じます。「最近どうして息苦しくなったのだろう？」と患者に尋ねられ、この患者は病気のことをどこまで知っているのだろう、どこまでのことを話せばいいのだろうかと悩み、返答を焦れば焦るほどその場しのぎの返答をしていることがあります。結局、テクニカルな面での理学療法の可能性ばかりを追求しようとして、患者の内面的なことを何も知らないでいる自分に気付くのに１年を要しました。「何かをしてあげよう」などと大それた事を考えず、これからは患者とのふれあいの機会を多く持ち、患者と共に活きて生きたいと思っています。

和泉浩史（北海道大学医学部附属病院）

医短時代はただ何となく過ごしてしまい、そのまま臨床に出て早くも5年が過ぎようとしています。学生時代は先生やスーパーバイザーの方々にいろいろ教えていただきましたが、十分に理解していなかったことも多くあったと思います。しかし実際に患者を治療し、学生を教える立場になって、先生方がいかに御苦労なさったかを身を持って経験しています。3年間本当にありがとうございました。

さて私も現在の職場に勤務し、今年で6年目を迎えようとしています。5年ひと区切りといいますが、4月から後輩も入ることですし、ここは一つ、また新たな気持ちで仕事に打ち込もうと思っています。

いままでいろいろな患者に接し、自分でもやりたいことが一つ二つ出ていますので、今年は自分のライフワーク的な仕事を明確にしていきたいと考えています。公私共に忙しくなりそうな年ですが頑張ります。

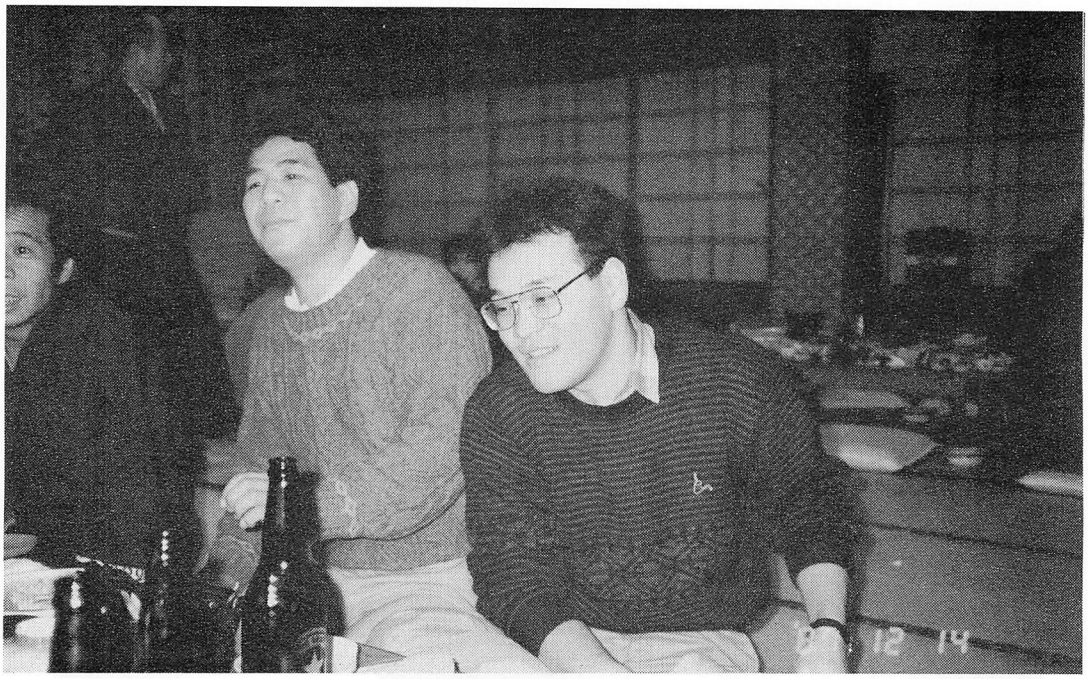
大山由紀（旧姓：井上）（所属：国立療養所西札幌病院）

ちょっと遅れた春でしたが、弘前での１人の生活が始まり、希望していた世界へ踏み出す期待と不安を胸に、とても熱い３年間でした。卒業はあっという間で、振り返る暇もなく、新しい世界へ駆け出した感じでした。

臨床に出てからは、理学療法士として学ぶことと同時に、見えてくる社会の思うようにならないじれったい状況の中、幾度か焦燥感にもかられました。そういう時は、患者さんを見つめる瞳にもだんだんと距離がでてきて、自分が冷めていくのを感じました。でも６年間で随分多くの人と出会い、いろいろな人生に関わってきたと思います。老人から子供まで接することができるため、私が与える以上に与えられることは多く、最近はとても人間がおもしろく感じられます。

これからも自分自身が心身共に健康で、それぞれの人達の思いをいつも素直に受け止めてあげれるようでありたいと思います。先生が卒業の時に送って下さった言葉をいつまでも忘れません。

岩井章洋（所属：山形県立中央病院）



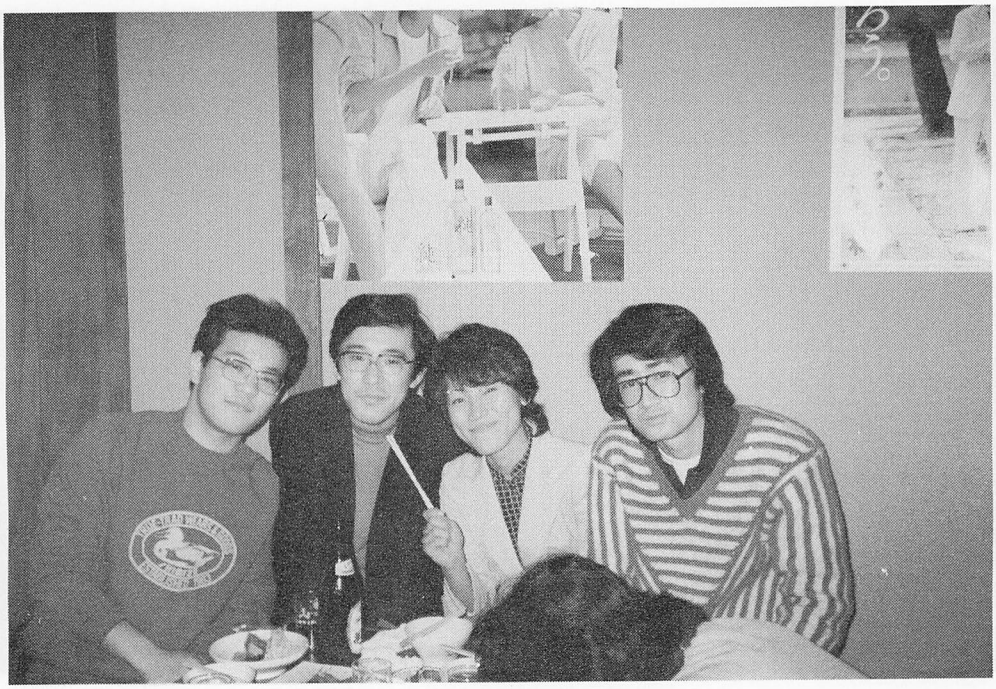
一期生として卒業して、はや6年になろうとしています。

菅原先生に対しては、いろいろな思い出もありますが、一番心に残っていることは、入学したてのころに先生が、”ＰＴは患者を治すのではなく、患者が治ろうと頑張っていることに対して手助けをすることである”という意味のことを言われたことです。私自身も患者と訓練しているときは常にこのことを考えて、今後とも患者との信頼関係を大切にして、治療にあたっていきたいと思います。

また自分ごとですが、去年の3月に結婚し、もうすぐ1年になろうとしています。今では新婚気分もなくなり、けっこう生活に追われているのが現状です。もし、これから子供が産まれたとしたら、どのくらい大変になるのかと想像しただけで、楽しみです。

時の過ぎるのは早いものですが、一日一日無駄にならないようにしていきたいと思います。

太田由美子（所属：化学療法研究所附属化研病院）



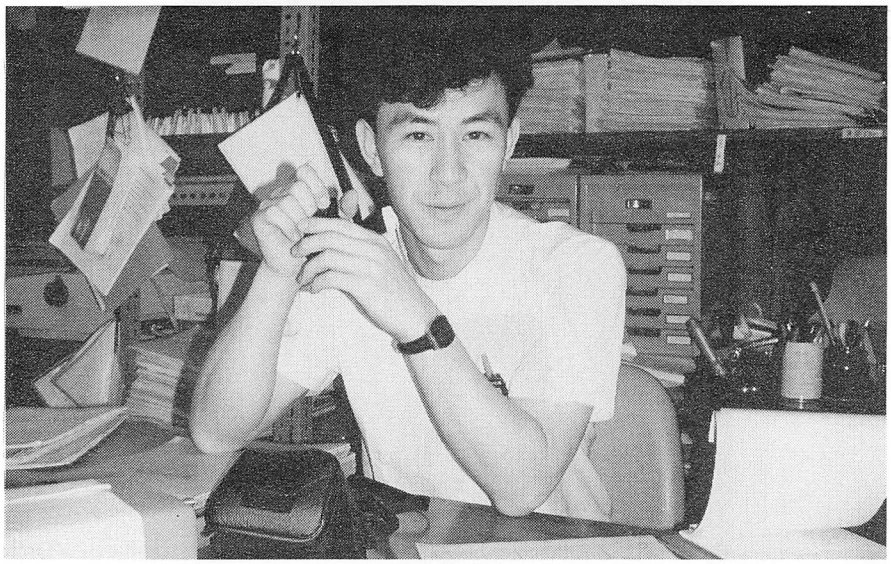
時間の流れがとても速く感じられるこの頃、私も年老いてきた証拠でしょうか。

壊れた陶器がもとにもどらない様に、時間をもどすことは不可能だから、思い出ばかりが増えていきます。

願わくは、せめて放物線のごとく生きていけたら……。

菅原教授、御苦労様でした。

尾田　敦（所属：弘前大学医学部附属病院）



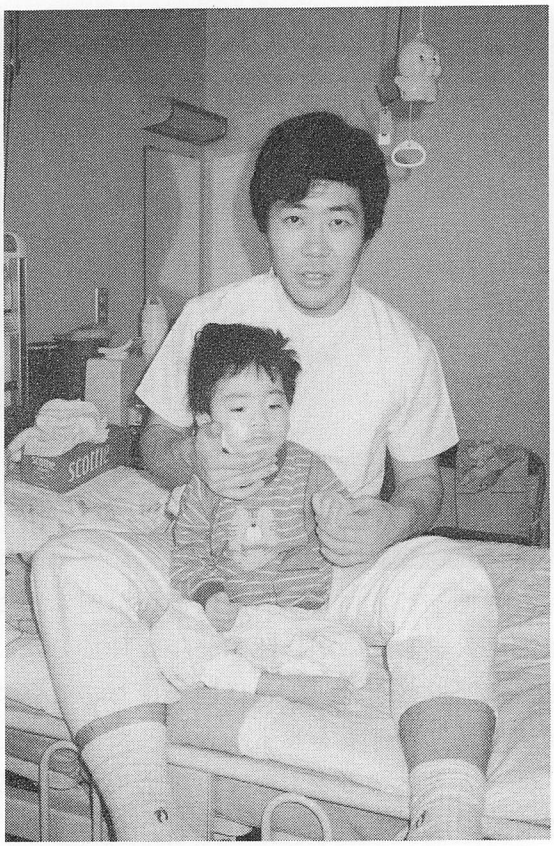
菅原先生、御退官おめでとうございます。その後いかがお過ごしでしょうか。

我々Ｉ期生が医療短大に入学したのが、昭和55年４月でした。ご存じのようにＩ期生のほとんどは、１度は挫折感を味わった経験を持ち、受験に失敗した者や他の職種に希望を見いだせずに新たな１歩を歩もうと臨んだ受験でした。幸い合格し入学できたその21名が、誰一人退学する者もなく無事卒業できたのも、先生のリハビリテーションに対する情熱が我々を引っ張ってくれたからです。また卒業後も様々な悩みや問題点を抱え、苦しんでいるときも叱咤激励の言葉をかけて下さいました。

大学病院は、治療・教育・研究の３つを兼ね備えた病院であるということが大きな特徴です。治療・研究はもちろん、教育面では後輩を育てる使命を背負って実習生の指導に当たっていますが、学生は「何がわからないのか」がわからないでいるのだということに遅蒔きながら５年目にして気付きました。学内では与えられたテーマをこなすだけのことしかしていないのだということです。ＰＴの対象は「机」ではなく「患者」であり、大原則は患者を「治す」のではなく「よくする」のだということです。この違いのわかるＰＴを育てていきたいと思う今日この頃です。

同期生も結婚する人が増え、短大に行くと菅原先生と会うなり「いい人見つかったかい？」といつも聞かされていました。結局退官されるまで一度も「ハイ」と大きな声で返事できなかったことが残念ですが、試行錯誤しながらいつも頭を抱えているこのような私の、大きな心の支えになって頂いたことを非常に感謝しております。今後も宜しく御指導お願い致します。

川口　徹（所属：青森市民病院）



「一路白頭ニ到ル」。菅原教授の顔を見る度に思うことである。彼の人生の意気に感ずるのは私だけではないはずである。皆さんは知っているでしょうか？ボソボソ話す講義に、強い情熱があったことを。時々聞こえなくなる声に、強い信念があったことを。又、黒板の流れる文字に、素敵なロマンスが見えかくれするのを。

ＰＴとしてのあり方ということより、人としての生き方の模範……つまり、ＰＴとしてイコール、人間としての姿勢を垣間見、学んできたような気がする。なにかしら「言葉」で修飾され、我々に伝わったことも多々ある。しかし、その本質は菅原教授の生き方すべてであり、むしろ、陰となる奥底にあったものに違いない。

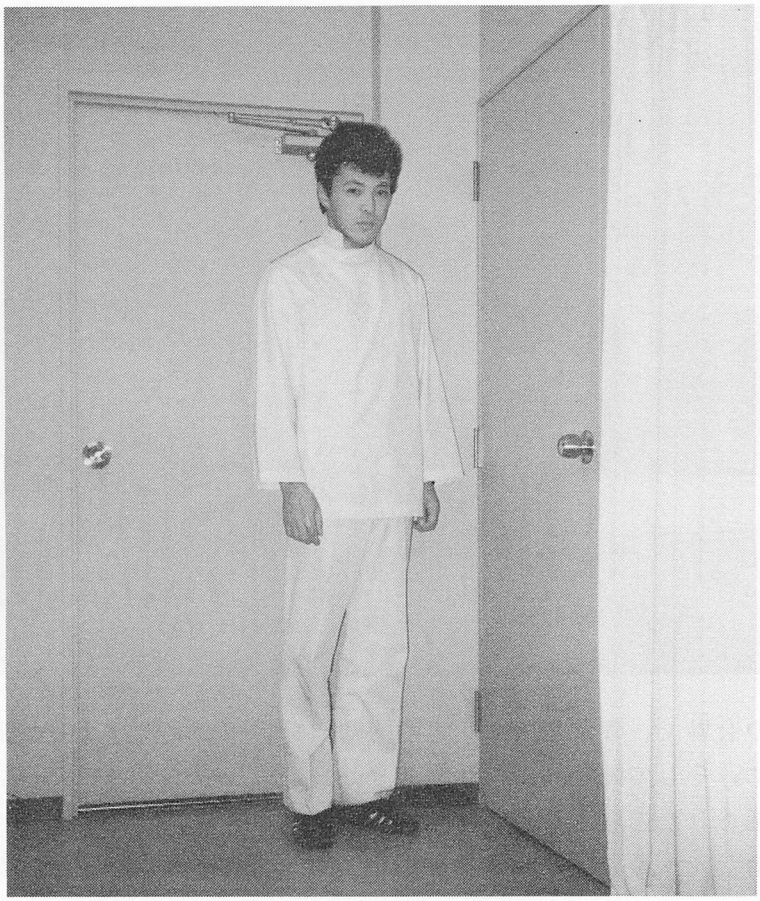
「退官」という悲しい言葉の響きには、様々な思いが入り交じっている。常に挑戦者である菅原教授のように、僕自身も情熱を持ち続けて行きたいものだ。

樹田康子（所属：埼玉県障害者リハビリテーションセンター）

入学試験の会場で、菅原先生は「専門的知識を学ぶだけではなく、幅広い人間性のあるＰＴに、そして国際的にも活躍できるＰＴになってもらいたい。」という主旨のことを話されたと思う。その時、私は「弘大で学びＰＴになろう。少しでも、身体の不自由な人々の力になれるように頑張ろう」と新たな決意をしたことを記憶している。

現在卒業して５年。新米ＰＴから中堅ＰＴと呼ばれることに、惑いと焦りを感じる今日この頃である。患者に対し最善の治療を行なってきたか？最善の努力をしてきたか？私はこういう事をしていると言えるものが自分にあるのか？と反省する。菅原先生は主として、障害児に対する療育と我々ＰＴの教育と歩行分析に力を注がれてきたと思う。私も先生のように自分のテーマを持ち、私はこういう事をしてきたんだと、大声で言えるよう、そして、常に患者の立場になって考えられるＰＴになれるよう、日々努力していきたいと思う。

栗林輝生（所属：鰺ヶ沢町立中央病院）

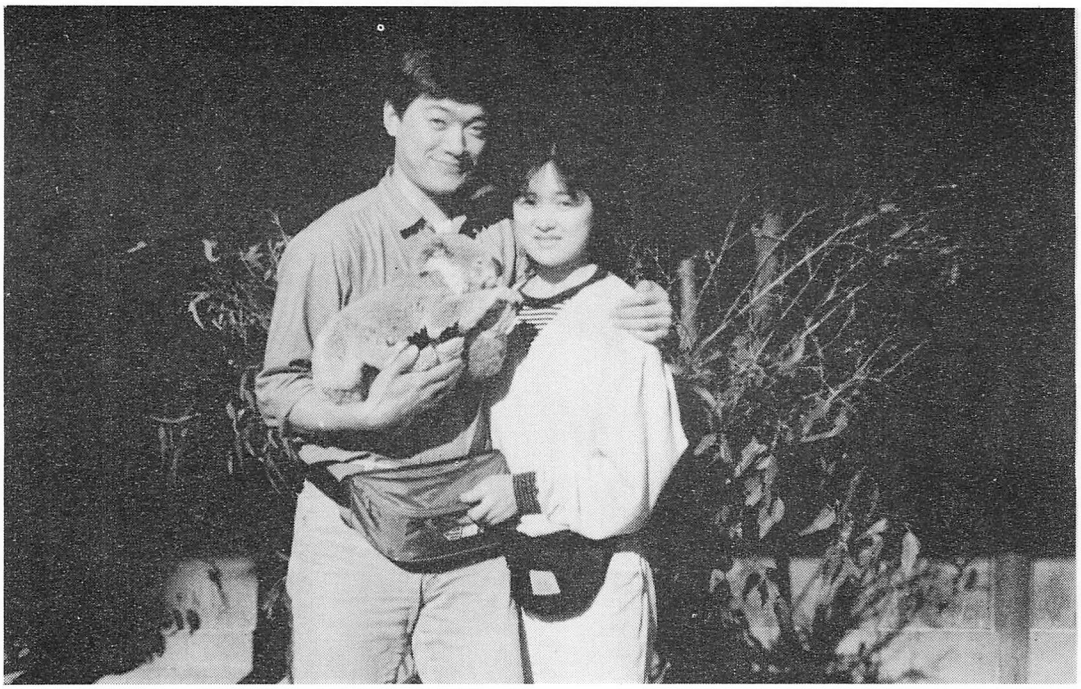


人間やっていくために考えた
人間やっていくために夢みた
人間やっていくために恋した
　　理学療法士が陸上競技場で走ったっていい
　　理学療法士が算数を勉強したっていい
　　理学療法士がテレビに出たっていい
人生なんてはかないものだ
青春なんてはかないものだ
恋なんてはかないものだ
　　尊いものは愛かもしれない

～栗林詩集より～

そんな愛を教えていただきました。
これからもその気持ちを忘れないように頑張ります。

後藤明教（所属：黒石市国民健康保険黒石病院）

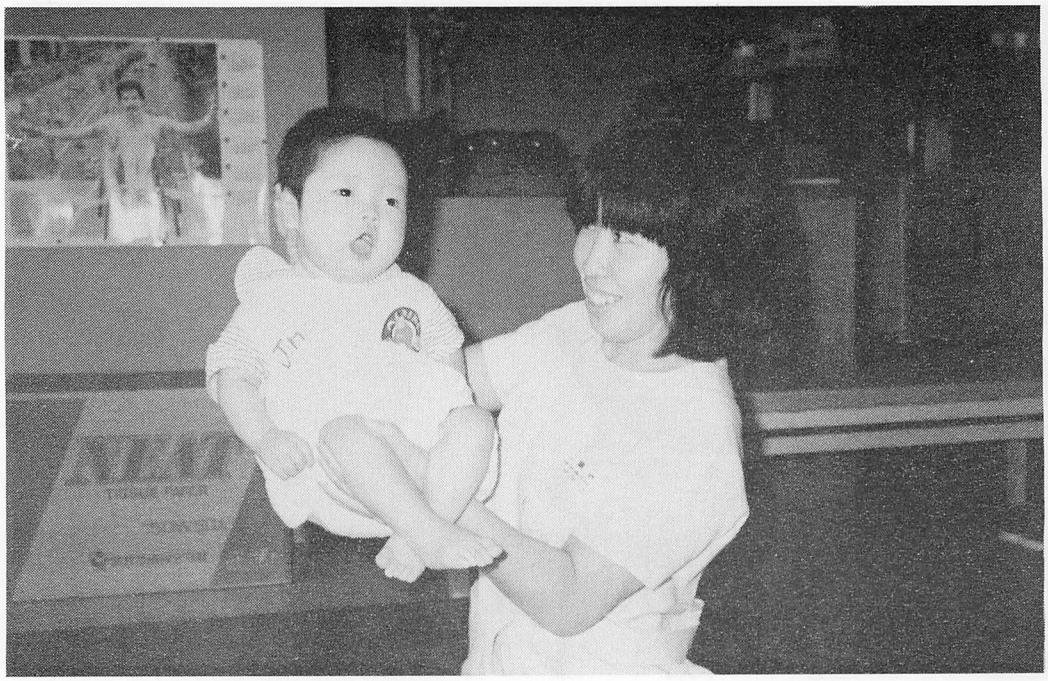


私は、ＲＰＴになって今年で丸５年になります。私の勤める黒石病院の訓練室は県内でも最も狭く117㎡しかありません。また、ＰＴしかいないので、たまにＯＴやＳＴのまね事もしています。対象患者も一般整形疾患から脳血管疾患まで幅広いので勉強する機会も多いのですが、少し怠けている時が多々あります。

話は変わりますが、どうにか私も去年結婚出来ました。（写真：妻と一緒にコアラを抱いて）。結婚すると、やっぱり自由の利く時間が少なくなりますが、そこをどうにか妻の機嫌を取ってやり繰りしています。

黒石病院も64年度より改築工事に入り、リハ施設も拡充されトータルなリハサービスが受けられるようになると思います。それに伴って、ＰＴの質の向上はもちろんですが、障害者の存在そのものを受容し、人間の苦しみや悲しみを感じとれるＰＴめざして頑張って行きたいと思います。

大堀伊久子（旧姓：小林）（所属：八戸市民病院）

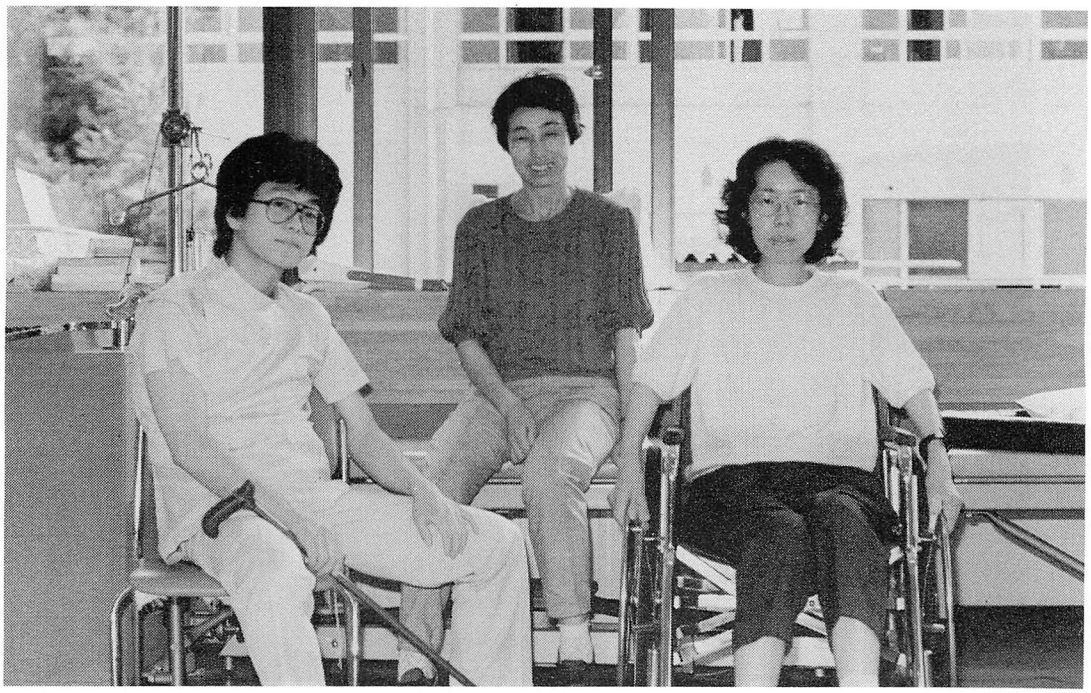


私の菅原先生に対する第一印象は、大学入試の試験官をされていた時、貫禄十分でドラマに出てくる大学教授そのままのイメージでびっくりした事です。ここで勉強出来たらいいなあと思いましたが、合格するなんて夢にも思わなく次の日から就職先を探していたというのが現実の姿でした。

思い出と言うと頭の中にシャボン玉が弾けるようにあふれ出て来ます。笑顔と励ましの言葉に幾度となく支えていただきました。

かなり出来の悪い娘ですけど、菅原先生の教え子として胸を張って何事にもぶつかっていきたいと思います。これまでの感謝の気持ちを言葉で表現するのは難しいのだけれど、8年間御苦労様でした。本当にありがとうございました。そしてこれからも宜しくお願い致します。

今　一成（所属：財団法人黎明郷リハビリテーション病院）



早いもので医短を卒業して５年が過ぎようとしています。３年間の大学時代を含めると、実に８年という月日が経過した。

卒業後は、短大に出向くことも少なくなり、教授と顔を会わせるのも数回しかなくなってしまった。

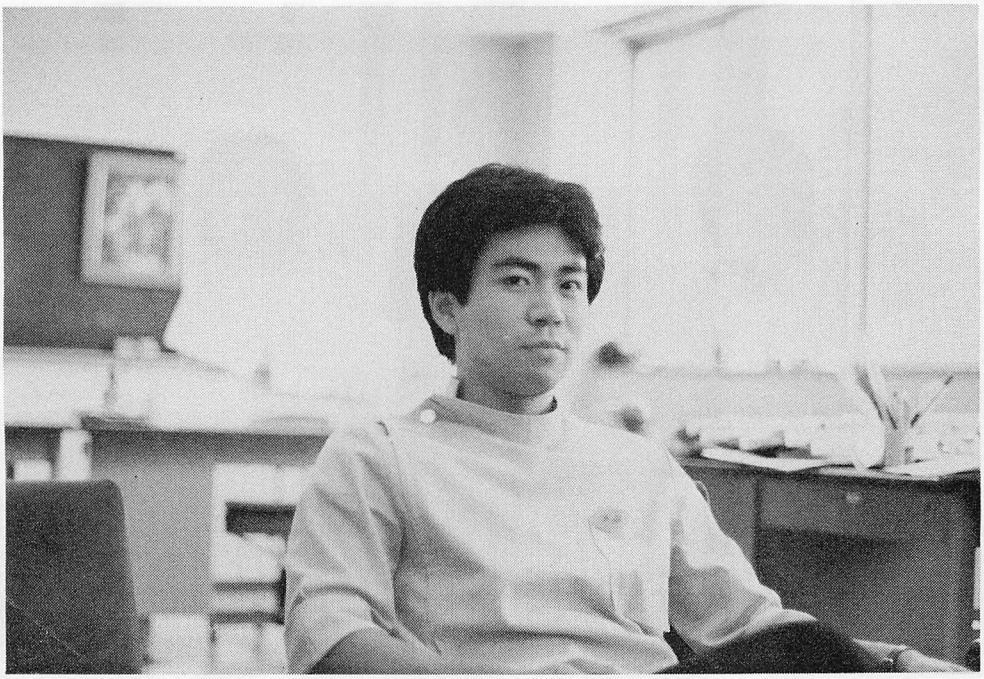
所用で短大に行き教授をみかけると、なにかしら『ほっ』とした気持ちになるのは、教授の人柄によるものかもしれない。このような教授ではあるが、たった一度だけ、ビビッたことがあった。

それは、教授が、授業の出席率の悪さに立腹され、教室に錠をかけてしまったときのことである。運よく自分は教室の中にいたのだが、教授からは想像もできない事件に、医学への強い情熱を感じたものである。

仕事がマンネリ化しそうになると、この時のことを思い出す自分です。

菅原教授、本当に御苦労様でした。

多田利信（所属：山形大学医学部附属病院）



1期生の多田です。私は頭の中の近況報告をします。昨年2週間程西ドイツに研修に行った時に感じた事から一つだけ述べます。

彼らは仕事と自分の時間をきっちりと分けていました。日本と違い昼休みや時間外に働く事は美徳ではありません。また、それがあたりまえの価値観であり無理なく出来る環境でもあります。勉強は自分の時間にもしますが、仕事は違います。ここまで書くと「そうはいってもうちの病院じゃとても」という人がいると思います。確かに現実はそうですが、私がいいたいのは現実に流されて本来あるべき姿を見失ってはいけないという事です。理想的な仕事のあり方を頭に描いて、少しずつでもそれに近づけるよう努力と工夫をし、職場の環境や価値観を量から質へ、見せかけから中身へと変えていかなければなりません。

現実はきびしいですが、なんとか満足いく仕事が出来る職場にしたいと思っています。

II　期　生

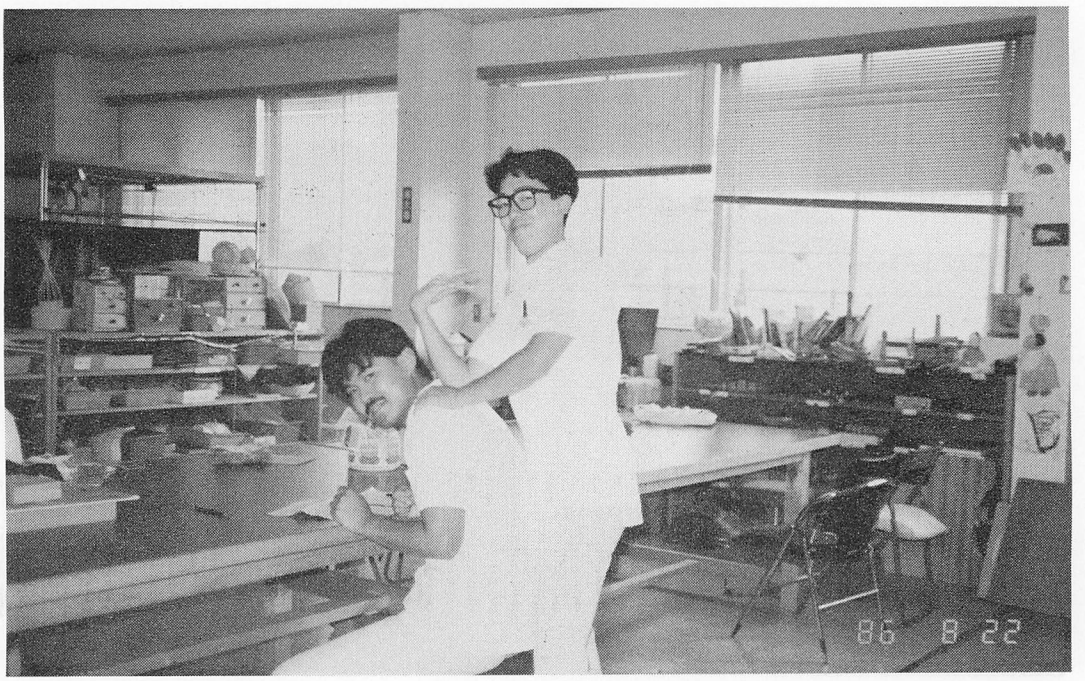
岩淵達也（所属：厚生連総合病院旭川厚生病院）

菅原先生、御退官おめでとうございます。

学生時代は夜遅くまでの予習復習のために午前中の講義にはなかなか出席できず、先生の講義も何度か欠席してしまいました。また講義中、先生からの御質問に対しても満足に答えられないことも多く、いろいろと御迷惑をおかけ致しました。

今年４月より新病院へ引っ越すことになり、施設面などやや充実してきますので、気持ちも新たに頑張りたいと思っています。先生も御健康に気をつけてこれからも御活躍下さい。

内田雅之（所属：北海道立旭川肢体不自由児総合療育センター）



生まれ故郷の旭川に帰ってきてから、早いもので８ヶ月過ぎてしまいました。今まで成人を相手に３年余りやってきたのが、突然子供達を相手にすることになりとまどう毎日でした。最近は、少しは慣れて子供達と楽しく過ごしています。しかし、ＣＰのむずかしさ、奥の深さをひしひしと感じている今日このごろです。また、抄読会、ケース検討会、自助具作製など、忙しいながらも楽しく過ごしています。

仕事以外では、スキー、飲み会などと頑張っています。特に、酒を飲む回数が増えてしまい肝臓が心配です。菅原先生も酒がお好きなようなので、旭川にお寄りの際には是非声をかけて下さい。旭川周辺の卒業生（ＰＴ，ＯＴとも）で、菅原先生をお待ちしとります。学生時代の思い出話に花をさかせましょう。（おいしい日本酒が待っております。）

本当に８年もの長い間、我々のためにありがとうございました。

内村　元（所属：労働福祉事業団千葉労災病院）

医短を卒業して早４年がたってしまいました。ＰＴの研究室でコーヒーを飲みながら菅原先生と話をしていて突然「内村、明日の講義（確かリハ医学Ⅱ）で膝の解剖をやって」と言われて慌てたのがついこの間のことのようです。あの後、図書館で解剖の本をあさり下宿で珍しく勉強したのでした。

ＰＴ・ＯＴ用の新館ができてＰＴの研究室を学生に開放して頂いたおかげで随分２期生が入り浸っていたように思います。確か１期生より多かったのではないでしょうか？あの研究室で私らがコーヒーを飲んでいると先生方がやってきて「またたむろしている！」と言われつつ先生方といろんな話をしましたが、まだリハについて漠然としたイメージしかもっていなかった私らに、いろいろ具体的に教えて頂いたのが非常に有難かったのを覚えています。最後になりましたが、皆さんの御発展をお祈りします。（写真はリハ科患者カラオケ大会のスナップです。）

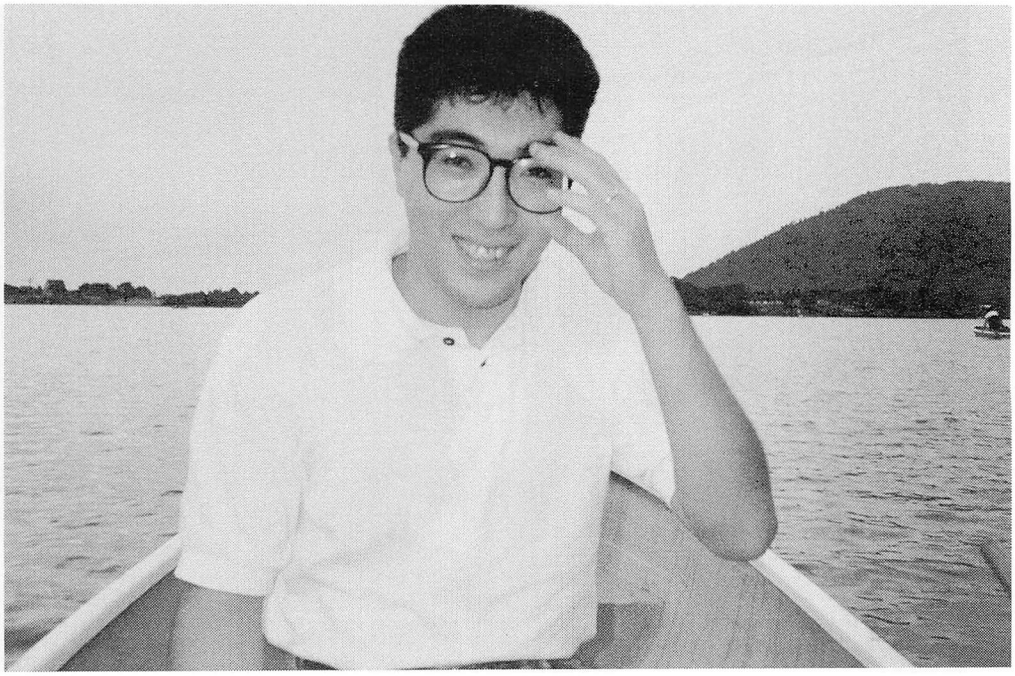
兜森智子（旧姓：柿崎）（自宅）

わがはいは、あかちゃんである。なまえは、まだない。おかーちゃんのおなかのなかにいるので“ぼく”なのか“わたし”なのかもわからない。

わがはいのおかーちゃんは、れいめいきょうというびょういんで“ぴいてぃ”というしごとをしている。きょねんの9がつにおとーちゃんとけっこんして、わがはいができたそうである。そのときに“すぴいち”というものをしてくれたのが、すがわらのおじーちゃんなのだそうだ。すがわらのおじーちゃんというのは、おかーちゃんのがっこーのせんせいで“ほねっちゅうかたちそれじたいの……”というべんきょーをおしえてくれたえらいひとなのである。でも、“けんたっきーのなんとかおじさん”みたいだとおかーちゃんはおもっているらしい。いつかおおきくなってすがわらのおじーちゃんにあえるかなー？

わがはいは9がつにこのよにでびゅうーするよていである。こんどおかーちゃんといっしょにみんなにあいにいくから、そのときはかわいがってね！ばいばい。

金沢善智（所属：医療法人社団埴原会赤羽病院）

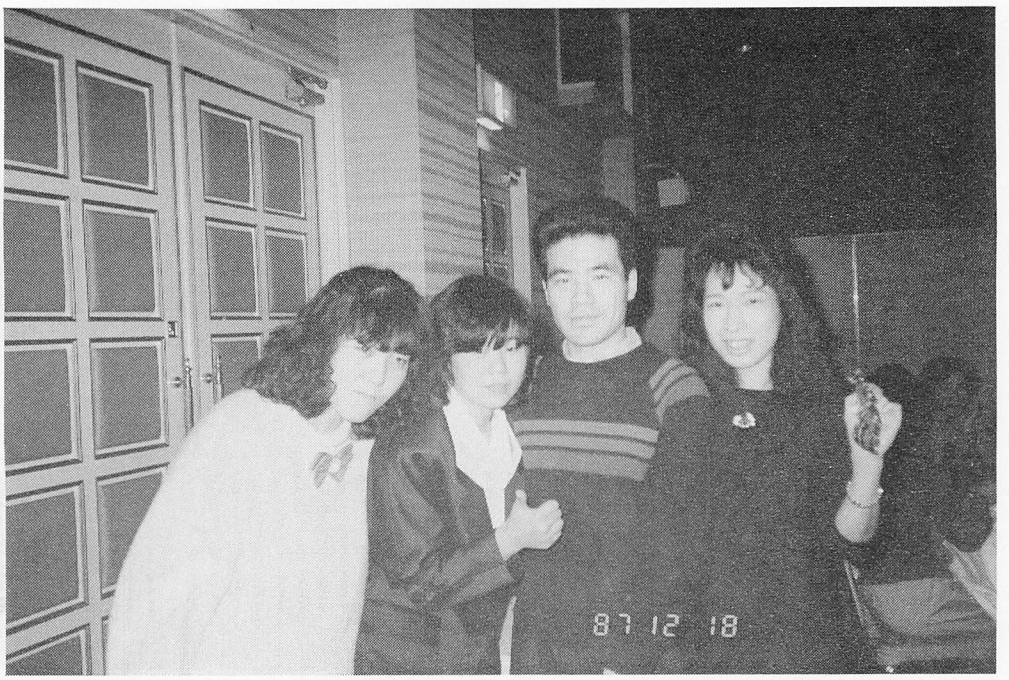


先生、長い間ごくろうさまでございました。そして、大変ありがとうございました。

私は菅原先生の授業が好きでした。一日に１回「ウホッ、ウホッ、ウホッ！」と「～という形で」と「～それ自体が……」を聞かないと体の調子が悪くなったことを、よく覚えています。誰かが、「今日は『形』が54回、『自体』が102回だった。」などと言っているのに対して、「おまえはアホか。そんなもの数えるな。」と言った私の机の上に『正』の字が並んでいたことは、今さら知る由もありません。

最後に、先生に一生のお願いがございます。どうか、いついつまでもお元気で、そして私の頭をまた一発「ゴツン！」とやってください。お願い申し上げます。

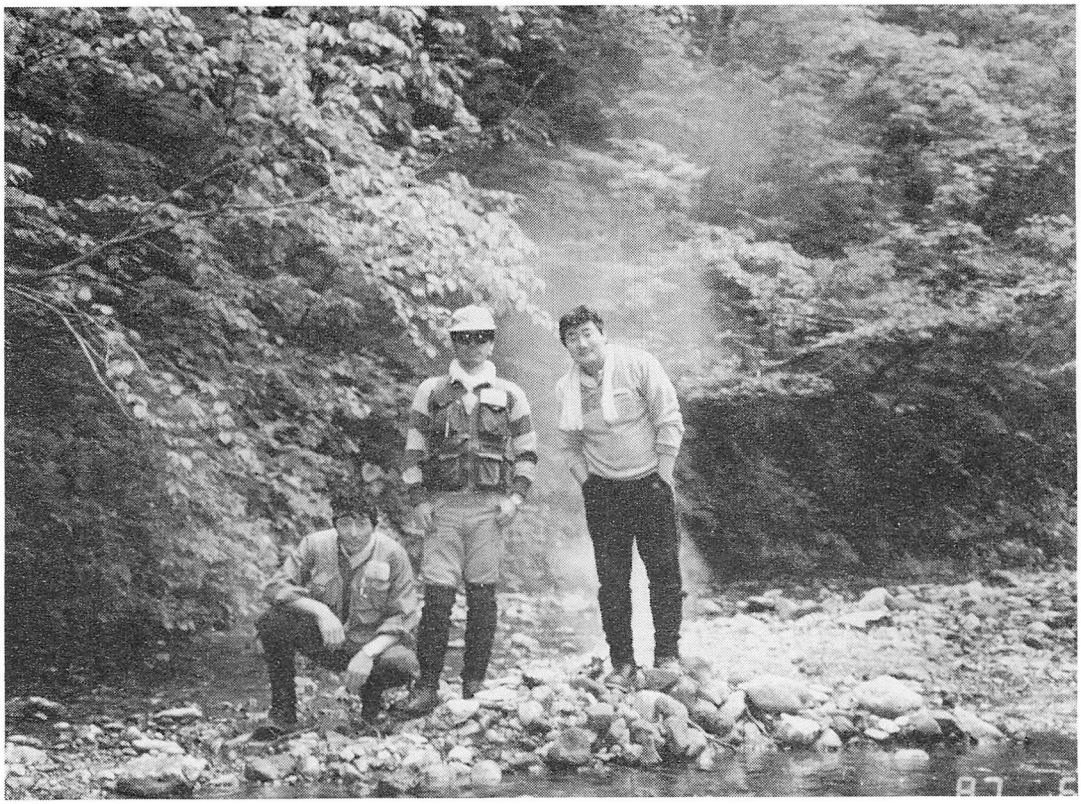
金　日根（所属：医療法人聡友会弘前記念病院）



当病院に勤務して6ヶ月になります。忘れかけていたリハビリテーションの知識は、来院して下さっている菅原教授、伊藤助教授の御指導を受けまして今日の私があるわけです。我理学療法科では、整形外科で大半を占めている中、このたび菅原教授が退官なされる今日まで、格別の御支援を賜り、厚くお礼申し上げます。今後とも菅原先生をはじめ、医療短大の御支援を仰ぎ、当病院の向上に全力をあげ、併せて患者のNeedsに精一杯応えてゆきたいと考えている次第です。

今私は、自己に磨きをかけるため、人騒がせな生涯教育に励んでいるところです。なかなか思うようにはいっていませんので、周囲の人は大変心配してくれていますが、近い将来はきっと目標を達成したいと考えております。医療短大に一番近い所に住んでいながら、ほとんど同窓会の仕事に協力できなくて本当に申し訳ございません。

金野　税（所属：労働福祉事業団秋田労災病院）

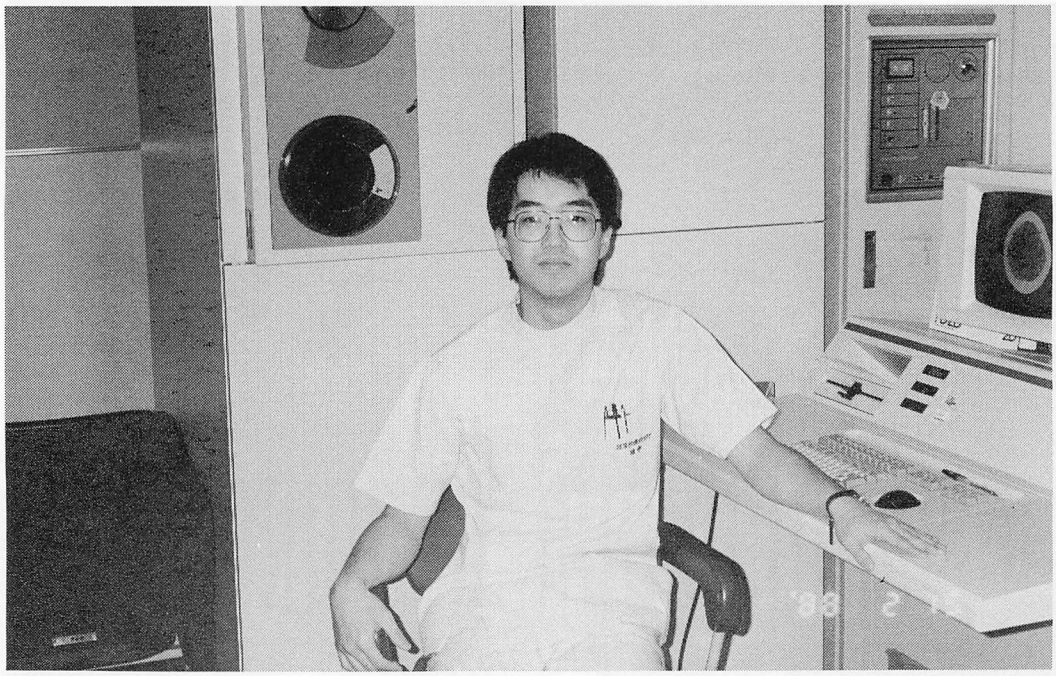


当労災病院に勤務する私は、弘前医療短大の２期生。26才。独身。仕事においては、活動性・健康状態・満足度ともに良好の状態ではあります。

度胸・愛嬌・優しさ・勉強をモットーに人との出会いを大切に暮して居ります。

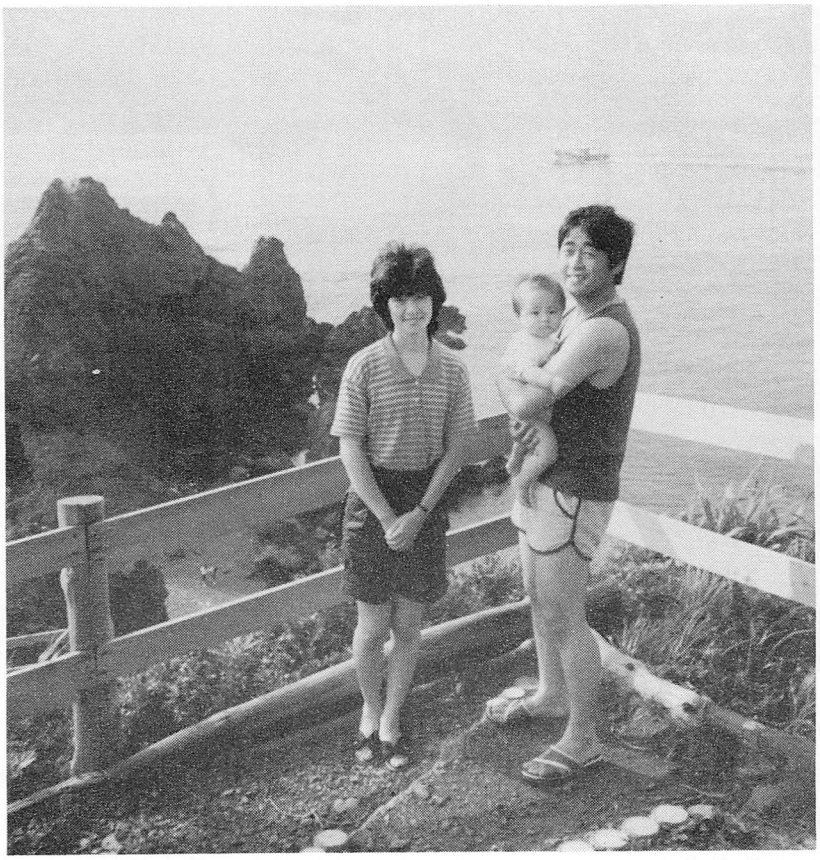
短大卒業後も、菅原先生・短大の諸先生方には大変お世話になりました。今後も色々ご迷惑をおかけすると思いますが、宜しくお願い致します。

田中幸生（所属：砂川市立病院）



医短の思い出。もう遠い遠い昔のことですネェ。ＰＴとなって、はや４年。一番の思い出は、やはり春の弘前城址でのコンパでしょう。先生方の飲みっぷりは、只々驚きの一言につきました。それを見て「多分俺でもＰＴになれる。」と確信することが出来ました。ーこれは冗談ですがーその中で菅原教授は真っ赤な顔をして人一倍大きな声で笑っておられました。講義では、その大きな腹部をゆさぶりながらニコニコと進められましたが、そのあまりの達筆さには少々閉口したことを今でも覚えております。国試の前にも不明な点を質問しに行くと、わかるまで根気よく教えて下さったこと、そして無事卒業出来た時のほっとされた顔が、とても懐かしく思い出されます。その教授が医短を去られる事は非常に残念ですが、これからの御活躍と御健康を、遠く北海道の地から願ってやみません。本当に長い間御苦労様でした。

中西功悦（所属：青森市民病院）



私は学生時代よりもＰＴとなってからの方が菅原先生に接する機会が増えたようです。私が最初に勤務した病院にリハＤｒとして菅原先生がいらしていたからです。菅原先生にはいろいろと御指導していただきましたが、私にとっては患者を思う“心”の大切さが一番勉強になったと思っています。

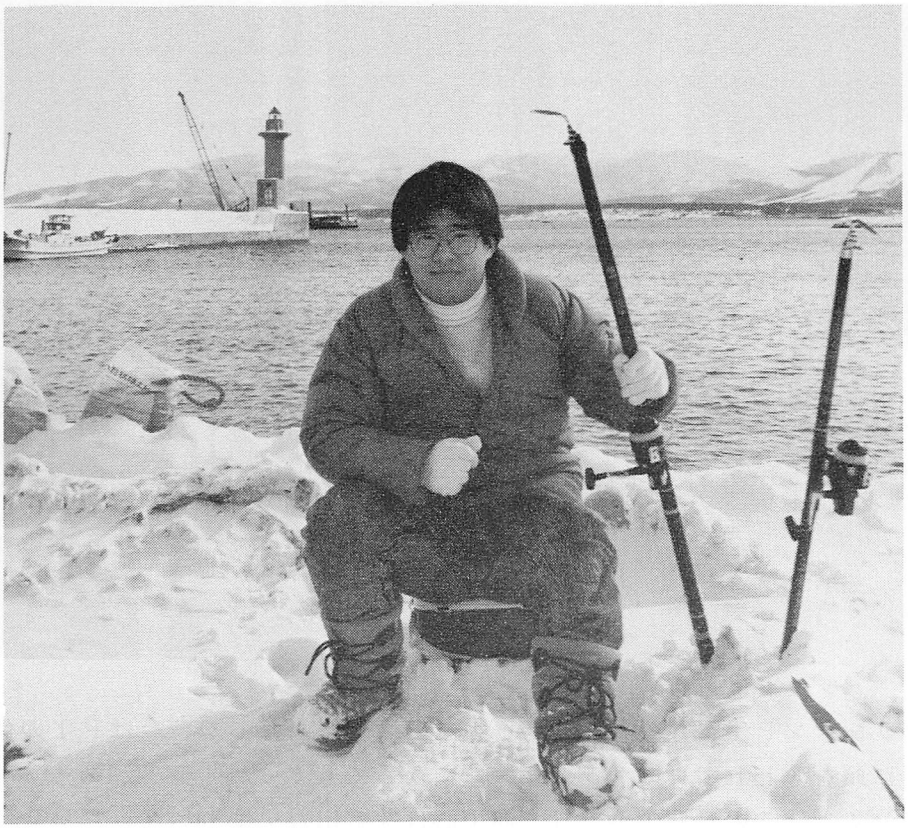
藤田智香子（所属：弘前大学医療技術短期大学部）

菅原先生は、ふだんは穏やかで優しい先生ですが、こと患者さんや学生の話になると“患者さん第一”“学生第一”の基本姿勢を貫くべく厳しい一面をお見せになります。厳しさの中には患者さんや学生に対する愛情がひしひしと感じられ、医療従事者として教育者としてつい忘れがちな、けれども一番大切なことを思い出させて下さいます。本当に長い間情熱を持ち続け、身を持ってお手本を示されてこられたことに対して、深く敬意を払うと共に感謝致します。

公私共にご心配をおかけすることも多く、お世話になりっぱなしです。お約束の花嫁衣装はだいぶ遅れそうですが、いつかきっと実現させたいと思いますので、楽しみにしていて下さい。

それでは長い間本当にご苦労様でした。そしてありがとうございました。これからのより一層のご活躍とご健康をお祈り致しております。

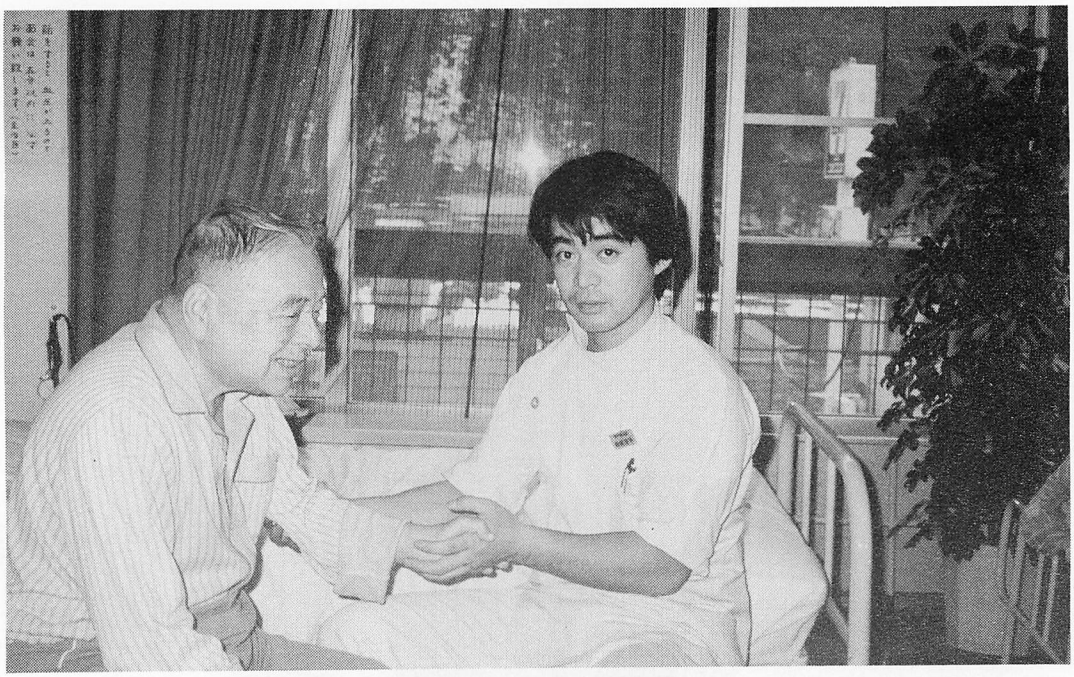
山田　伸（所属：青森県立中央病院）



青函連絡船は今年３月で廃船となってしまいます。帰省で数え切れないほどお世話になっており、ちょっとさみしいですね。そうそう、今年の帰省（昨年というのかなァ）で最後の連絡船だから何かあるのではないかという期待があったわけではないが、わざわざ１月１日の第一便を選んで乗船したら“ゆく年来る年”の生中継をやっていたので、ずうずうしくも顔を出したら、この顔が全国放送されてしまいました。

今、青森は雪、雪……。屋根に降り積もった雪の量を見て“そろそろ圧迫骨折の季節がやってきたか”と青森の冬の厳しさを実感しています。でも、屋内に閉じ込もっていないで、釣にスキーに out door life を enjoy しています。そして、毎日元気に“雪かき”をしています。（もう雪なんていらないぞ〜。欲しい方にはお送り致します。）

横島啓幸（所属：財団法人太田総合病院附属熱海総合病院）

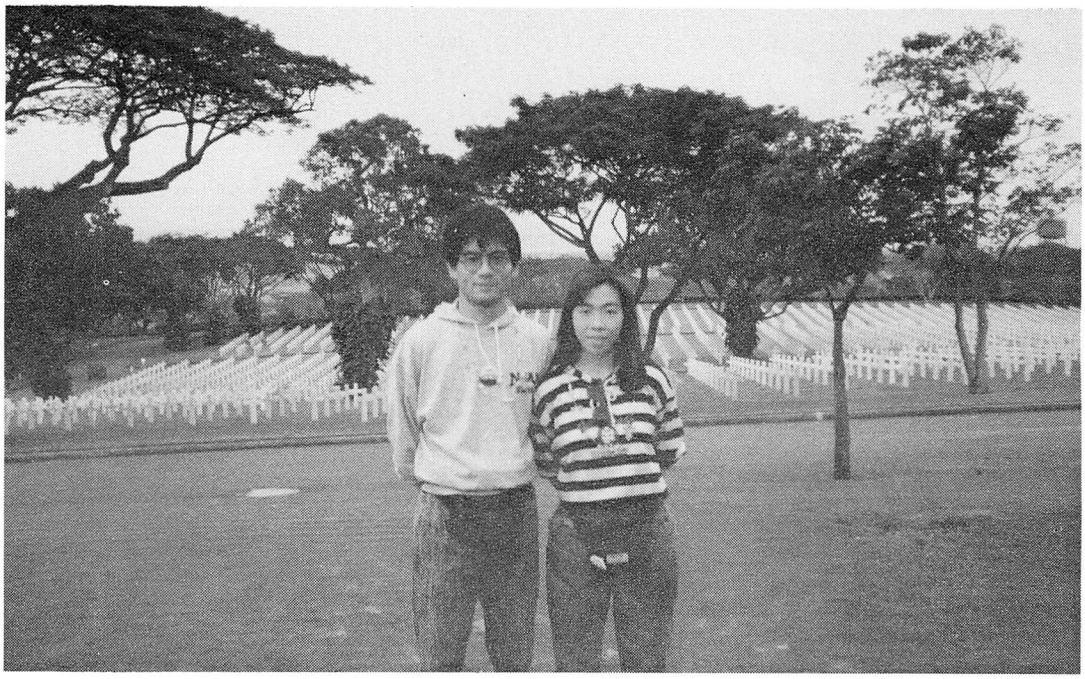


「サラリーマンＰＴになるな」という大学の教えもむなしく、今はＰＴの仕事よりも雑用に頭を奪われて真のサラリーマンになってしまったようで寂しい気がする。一日が終わると残るのは疲労感だけで向上心は芽も出ないありさま。

しかし、白衣を着ると患者さんの顔がすぐに浮かび上がり、「今日はどこまで進歩したかな」と考えられるからまだ救われる。こんな事もなければ毎日が無味乾燥な日々で自己を見失うであろう。

弘前という言葉や教官の声を聞くたびにまだ初心に帰れるから今度の同窓会は私を甦えらせてくれることを信じ祈っている。でも菅原教授の退官は私の初心を忘れさせてしまいそうで残念でならない。

松尾真里子（旧姓：奈良岡）（所属：青森リハビリテーション病院）



卒業してから今日まで、職場が変わり、住所が変わり、名前が変わりと、最近では特にあわただしい日々を過ごしています。

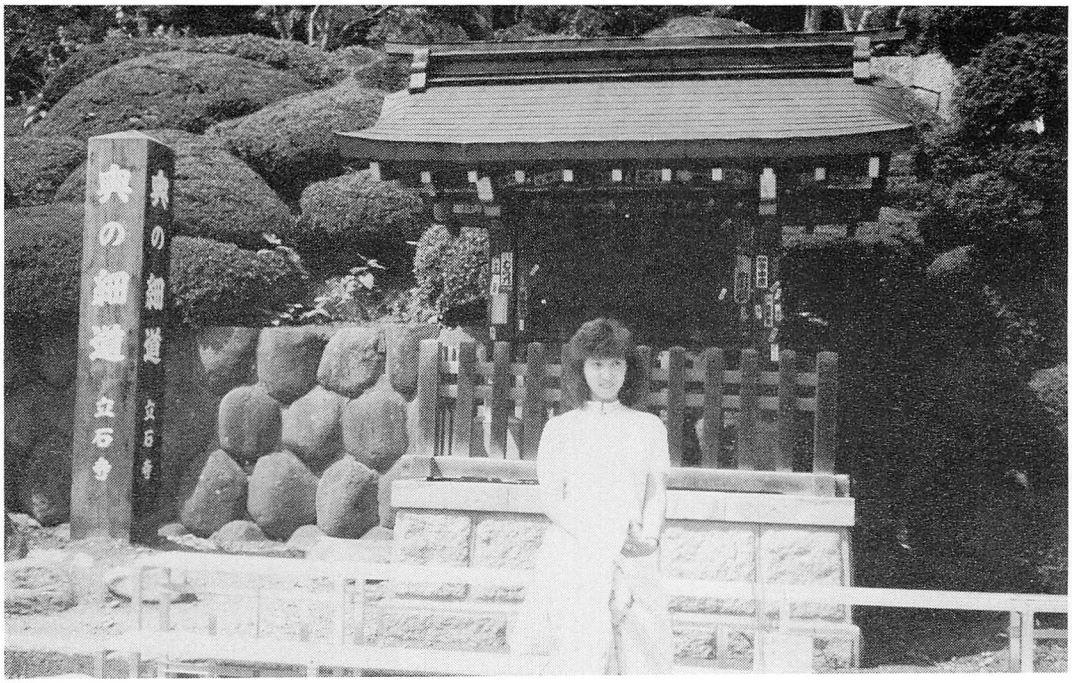
弘前に在学中の思い出はそんなに楽しいことばかりではありません。なんといったって、人よりも多く学んだわけですから、もう少し博学に満ちた人間になっていてもおかしくないのに、どうして今だに自信を持てないのか。社会人になってもう４年になろうとしているのに、今の仕事にまだ悩む所が少なくありません。

そんな私も、この秋には母親になろうとしています。仕事面だけでなく、生活面においても不安は尽きないけれども、背伸びはやめて、自分相応のそれなりの人生を送りたいと思っています。

菅原先生にとっては弘前時代は長かったでしょうか、それとも短かったでしょうか。いろいろと御苦労様でした。

III　期　生

八代啓子（旧姓：五十嵐）（所属：新潟県立瀬波病院）

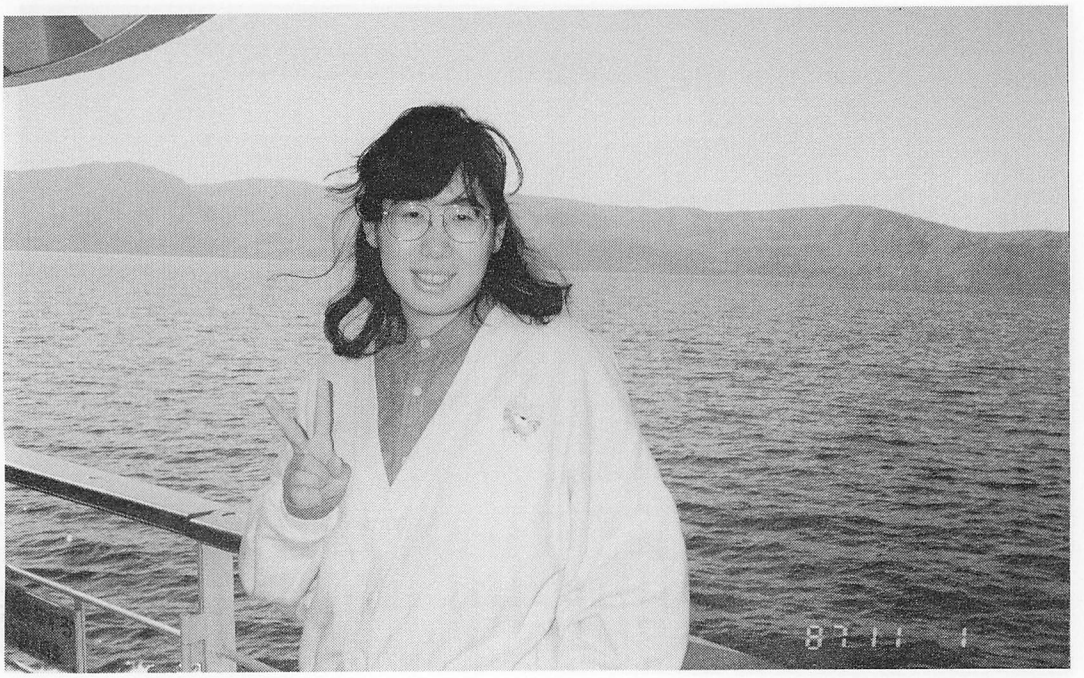


学生時代、決して出来のよい生徒でなかった私が、とにかく感謝しているのは、運動学の試験です。「菅原先生、出席日数が足りなかったにもかかわらず、試験を受けさせてくれてどうもありがとうございました。」

また先日は雪降る中、結婚式に出席していただき本当に感激しております。

それにしても菅原先生、あのほとんど授業に出ない（出ても居眠りばかりで……）学生がＰＴとしてどうにか働き、人並に結婚し、主婦をやっているのです。不思議といえば不思議です。そして月日の流れは早いもので、この夏には母になるべく、大きいおなかをかかえ、毎日頑張っています。いずれ子供を抱いていただきに参上できることと思います。どうぞ楽しみにしていて下さい。いつまでもお元気で。

加藤和枝（旧姓：梅津）（所属：秋田県厚生連湖東総合病院）



医短を卒業してから、早いもので3年が過ぎようとしています。湖東病院に勤務して、田んぼのまん中で毎日のんびり暮らしています。勉強しなくてはいけないことがたくさんあるのですが、あれもこれもという思いばかりが先に立って、なかなか進歩しないというのが現状です。少しずつでも毎日の積み重ねが大切なのだと思いますが……。

私的には、湖東病院のリハビリのスタッフは相変わらず皆独身なので（実習に行った人はわかると思いますが）今年こそは、まず若い者から先に……と考えています。

医短時代の思い出は色々たくさんあって何を書いたらいいのか……うまくまとまりません。

菅原先生、今まで御苦労さまでした。そしてこれからもよろしくお願いします。

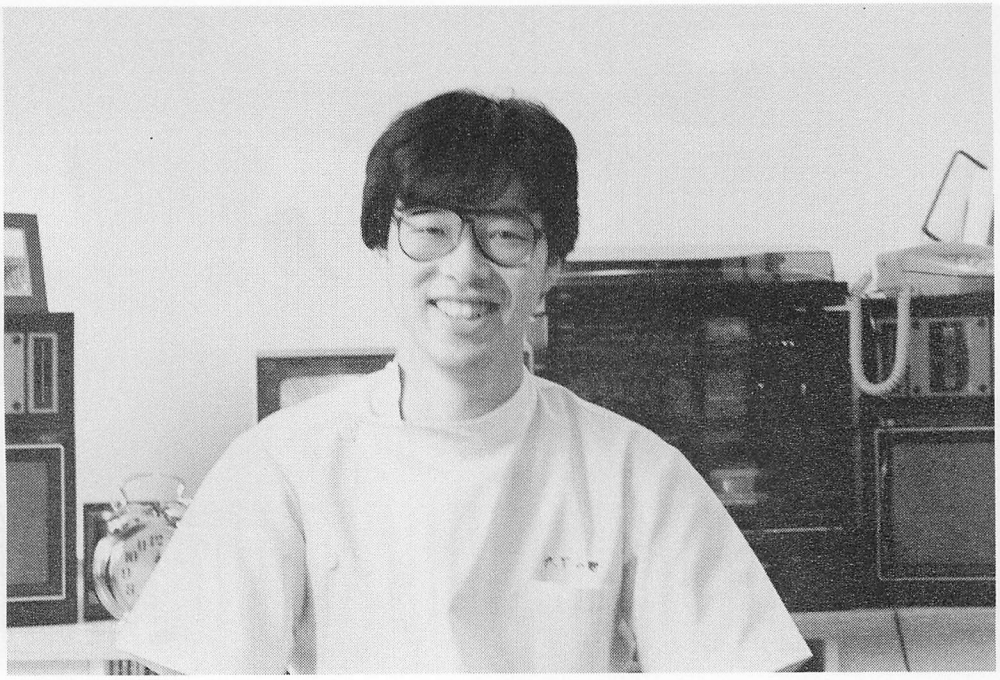
大場みゆき（所属：医療法人明和会中通リハビリテーション病院）

菅原先生、長い間御苦労さまでした。先生が教壇から去られるのかと思うと、本当に悲しい思いです。

春の桜、夏のねぷた、秋のもみじ、冬の雪燈籠と四季おりおりの風物を背景に、弘前で過ごした３年間は、私にとってとても有意義なことでした。リハビリとは何かも知らずにこの世界に飛び込んで、挫折、後悔したこともありました。しかし学校の教官、友人に励まされ刺激されどうにか卒業し、現在、理学療法士として働いていることを大変誇りに思っています。

就職してはや３年、肉体的に疲れる毎日ですが、その点は若さでカバーできますが、なかなか太ることができないのが悩みです。私も定年退職するまで、バリバリのＰＴとして働いていくつもりです。菅原先生、これからもずっと御指導、よろしくお願いします。

小野博明（所属：厚生連総合病院網走厚生病院）

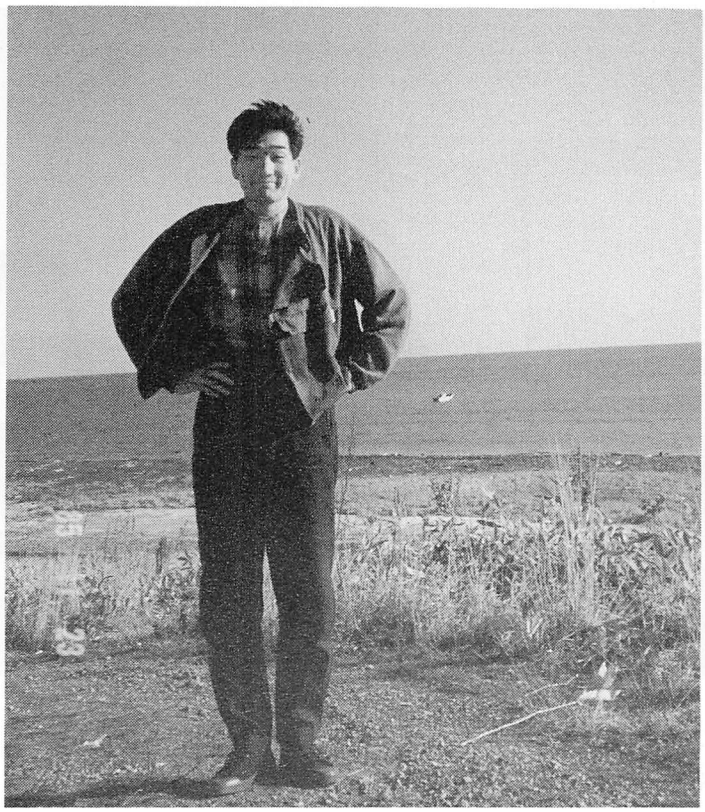


最果てのＰＴ？小野です。医短を卒業して３年になろうとは、時がたつのは早いものですね。医短時代の思い出といえば、実習とコンパと卒論の３本柱で代表できる気がします。中でも卒論には苦労しましたが、今一番勉強したと思えるのは卒論の制作中だったのではないかと思います。諸先生方には御迷惑ばかりおかけしてすみませんでした。

網走の冬もこれで２回目ですが、寒さには自信があった私ですが、流氷が入ってからの網走の寒さというものには耐え難いものを感じており、身も心も、ついでにふところも凍りそうな毎日ですが、元気にＰＴしております。

最近は当院のリハビリテーション科も地域に浸透してきており、患者さんの数も順調に増え、今春にはＰＴも１人増員されることとなり今後はより密度の高い、地域に根ざしたリハビリテーションを目標にがんばっていきたいと思います。

小野寺誠二（所属：厚生連総合病院帯広厚生病院）



菅原先生、御退官お目出とうございます。先生のお姿が弘大医短から消えたとなると、弘前に行く楽しみが少し減ったような気がします。私の先生の思い出といえば忘れられないことが一つありますのでそれを書きたいと思います。

大学の卒業記念の寄せ書きに先生は「貴方の名前には誠が二つあります。一つは自分自身に対し、もう一つは患者に与え共に笑い合える環境を作って下さい。」と書いて下さいました。私はこの言葉で初めて自分の名前の本当の意味を知ったような気がし、就職してから仕事に対し、また私生活においても常にこれを心がけるようにしています。そのためか職場には一期生の鈴木誠先輩がおられますし、住んでいるアパートは「まことハウス」といい、私の周辺はマコトだらけになりました。先生、これはどうすればいいですか？

私の名前に意味を与えて下さった菅原先生にこの場を借りてお礼を申し上げると共に、先生の御健康と益々の御活躍をお祈り致します。

小野寺良子（所属：公立気仙沼総合病院）

ＲＰＴとして３年目を終えようとしている現在、２月15日より２年次臨床実習（３週間）のＳ.Ｖ.をしています。今更ながら、学生を指導するということの難しさと共に、いかに自分が日々の臨床において数をこなすだけのものに終ってしまっているかを痛感させられています。

ところで、毎年確実に同窓生が増え、同じ県士会にもわずかずつながら弘大医短出身のＰＴが入会してきているのに、全くといって良い程コンタクトがとれないでいるのは、本当に残念です。今後はもう少し、互いに努力をしながら、困った時には相談にのれるような関係をもてれば……と考えています。

上長根妙子（所属：青森県立はまなす学園）

就職して、はや４年目を迎えようとしています。３年間ＰＴとして何をやってきたのだろうと、ふり返ってみると疑問な事ばかりです。こんな悩んでいる時には同級生の声を聞くと、なんとなくホッとする私です。

卒業時に“同級生は大切にしろ、友人しか相談できない時もあるのだから”と、ある先生が言っておられたことを思い出します。短大時代は、夜遅くまで友人とＰＴや患者さんのこと、人生観についてもオープンに自分の思っていることをとことん言う場があったように思います。職場に入り、自分の考えもだんだん変化していき、臨床経験も様々な人間関係の中でたった３年間の意見が通じ、治療に反映されているのかわからなくなることもあります。

こんな時、友人の意見を当てにし、励みにしています。お世話になった先生方、自己流に流されてしまわないよう、ご支援、ご指導、今後ともよろしくお願いします!!

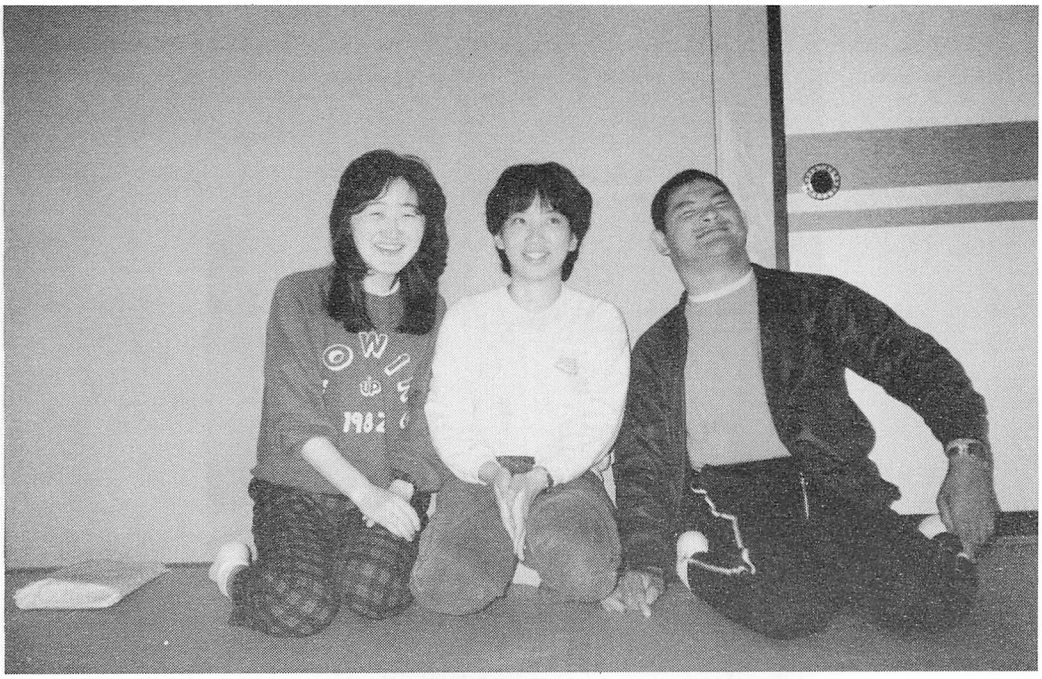
山田朋子（旧姓：工藤）（自宅）

医短に入学し、見・聞きするものすべてが新しく感じられたことや、友達と一緒に夜遅くまで話をしたことが、昨日のことのように思い出されます。

卒業して3年、4年目になろうとしていますが、学生時代に想っていた将来とは、大分違うような気がします。特に、菅原教授が退官される時に、子供を身ごもっているとは、私自身、想像しなかった事で、木造町という田舎に引っ込んで、毎日同じ事をやっているように思えても、確実に年はとっているのだなあと、思い知らされます。

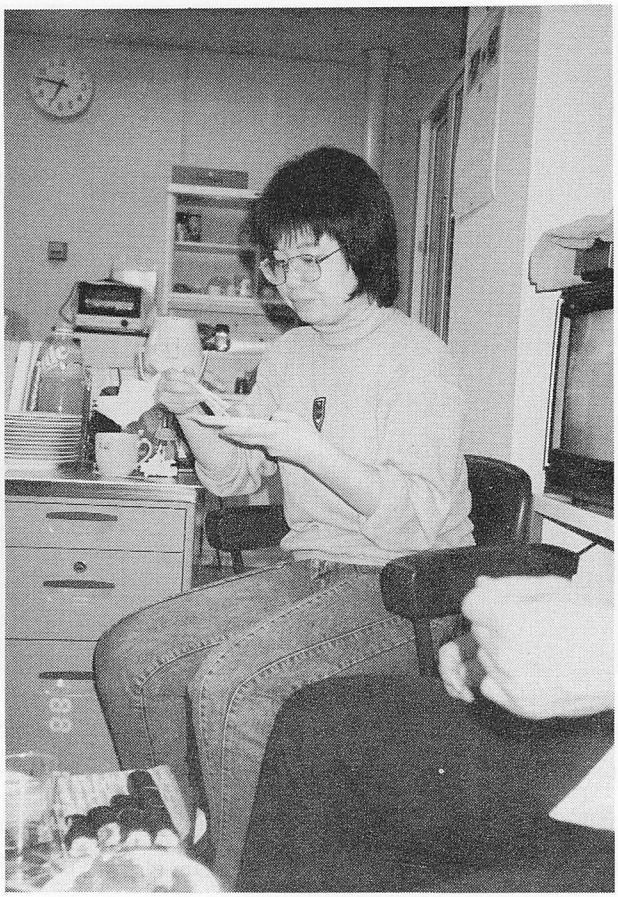
これからは、子供を背負って、学会等で皆さんと会いたいと思ってます。

高橋伸子（所属：国立習志野病院）



あこがれの東京！！からちょっとはずれにある千葉・習志野に単身出稼ぎに来てはや１年になろうとしています。多人数の職員とともにＰＴ業務に専念（？）できた以前とは異なり、仕事の内容はむしろ楽なくらいですが、一人職場ゆえの精神的な苦労はやはり感じてしまいます。指導してくれるDr.はいない、近くに相談できる友人もなし、年の近い子といえば看護学生くらい、親と子ほども年の違うスタッフの中で、しかもチーフ的な役割をしなくてはならない、給料は安い、……とまあ、あんまり良い環境ではないのかもしれません。しかし、医療過疎県・千葉では、ＰＴのいない地域が県面積の1/3くらいあるようなので、ま、世のため人のため（になっているかは自信がありませんが）がんばってみたいと思っています。勉強しようと思えば何でもできて、さぼろうと思えばいくらでもさぼれる一人職場、私のような偏屈者には合ってるかもしれません。さあ、がんばるぞっ☆☆

田中明美（所属：埼玉県立小児医療センター）

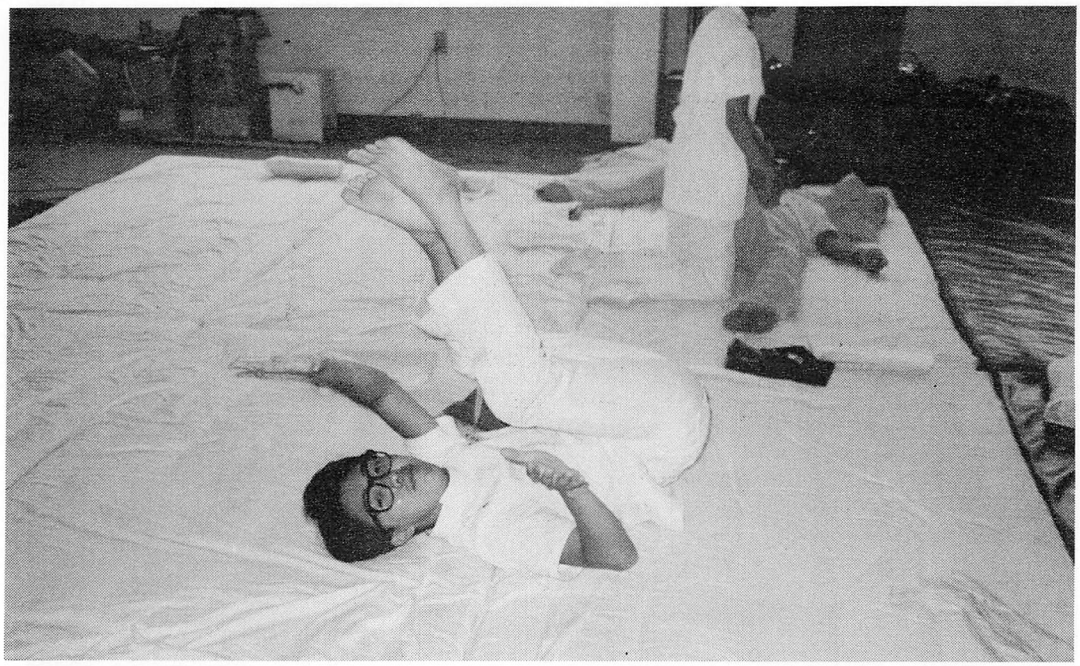


埼玉に戻り、もう３年がたとうとしておりますが、今でも、弘前・御岩木山・りんご等と聞くと、ついついテレビの前に座り込んでしまいます。

今年の２月４日の朝、10年の間、良き家族であった犬のチビが急死しました（おそらく心不全と思われます）。ふと、昔の夢を想いました。「獣医になっていたら、チビはもう少し長生きしただろうか。」もしそうなら、盛岡が第二の故郷になっていたでしょう（岩手大学を目指しておりましたので……）。弘前に行ってからもなお、未練を残していた私は、友人に、「動物のリハビリでもやれば」と言われ、それも面白いかなと、真剣に考えたものです。

今、ＰＴになって良かったと思うそんな自分が、小さくまとまったつまらない人間に思えてしまうのは、多くの難題を抱え、大きな可能性を持って一生懸命生きている子供達に、毎日囲まれているからでしょうか。

奈良　剛（所属：医療法人ときわ会ときわ会病院）



きんきょーほーこく。
私は、

元気！

です。

菅原先生、８年間ご苦労さまでした。卒業式の時に先生が送って下さった歌を忘れずに頑張っていきたいと思います。数々のご指導本当にありがとうございました。

沼倉たまき （所属：青葉病院）

でっぱったおなか、豪快な笑い、縦書きの板書、読めない文字、うさぎの解剖、お弁当を作ってくる先生、少しうつ向きかげんで歩く先生、試験問題は意地悪することがあるけれども試験時間中は助けてくれることもある先生、ちょっぴり寂しそうな先生の背中……。そして医療に携わる者の心を教えて下さったのが菅原先生です。

ＰＴとして３年が過ぎ去ろうとしている今、仕事に追われ、自分自身へのいら立ちと焦りの日々、ふと思い出すのが菅原先生の言葉です。『患者さんの痛みのわかる人でありなさい。患者さんの苦しみを一緒に支えてあげなさい。そのためには、まず自分自身が強く厳しい人間でなければならないのです。』

畠山　優（所属：大館市立総合病院）

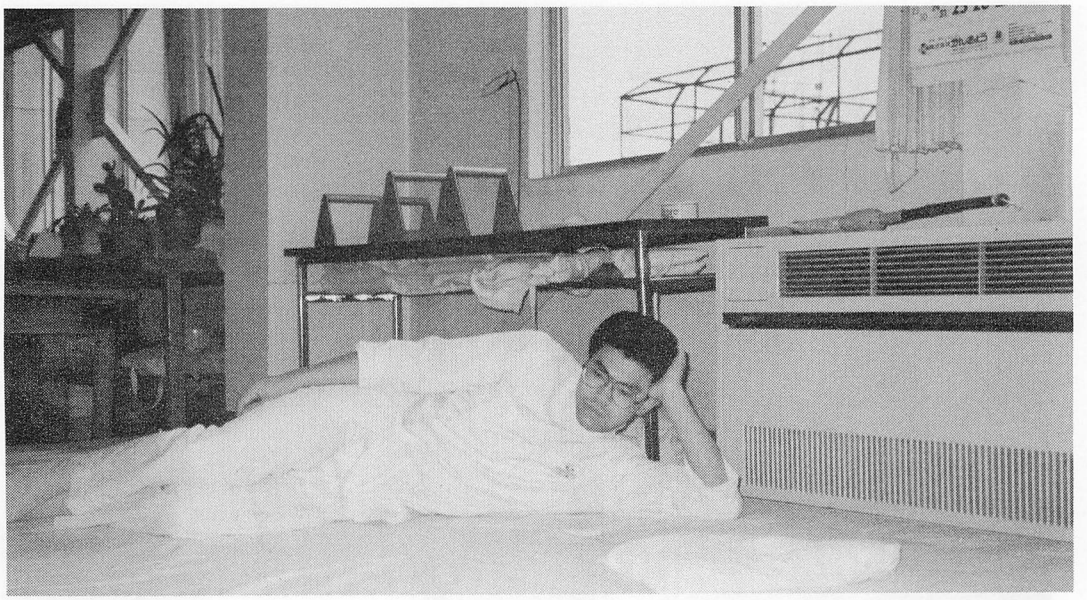
菅原教授がこの度退官なされましたが、菅原教授に学んだ３年間の学生時代がいろいろと思い出されます。

私は第３期生として昭和57年４月に、理学療法士を志し入学しました。先生にはリハビリテーションとは何か、また理学療法とは何かという、基本的な考え方を学びました。そして今もそれが私自身の理学療法士としての基礎となっていると思います。

卒業時に先生にいただいた色紙の中の「幾度かやめる人見て意をかたむ　つらさのりこえ励まむとこそ」という言葉を心に刻み込んで理学療法士として仕事に携わっていきたいと思っています。

菅原教授にはいつもどっしりと構え、あの笑顔で私達を受け入れてくれる“おやじ”みたいな存在であり、心の師であってほしいと思います。これからも健康に留意され、リハビリテーション医療の先端でご活躍されることを心よりお祈り申し上げます。

三沢範人（所属：鹿角組合総合病院）



(1)　医短時代の思い出ベスト10

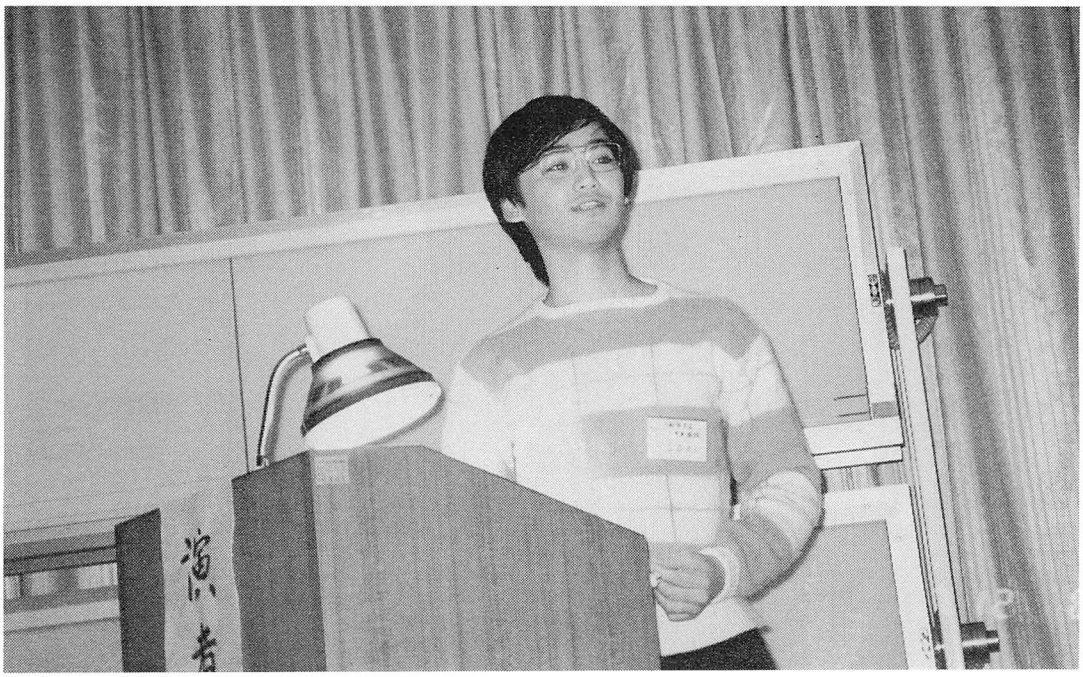
①コンパ等で友達、先生方と飲んだこと。
②授業をさぼり、パチンコに徹したこと。
③日本海中部地震の体験。
④新車をぶつけ、修理費6万円かかったこと。
⑤加藤現の退学。
⑥豪快に笑う菅原教授の寛大さ。
⑦生協のコープ定食。
⑧インスタントラーメンの連続の日々。
⑨正常歩行とカナダ式股義足の英文和訳。
⑩風来坊のユキさんの顔。

(2)　近況報告

毎日が患者との戦いって感じです。一方、労働組合の執行委員もやっており、忙しい日々を送ってます。昨年10月には家も新築し、これを機に、小坂町消防第3分団に所属し、消防活動にも頑張ってます。

最後に、「暖房器具等、火の元、火の取り扱いにはくれぐれも注意して下さい。」「火の用心!!」

山谷光仁（所属：十和田市立中央病院）



医短時代の思い出？

というわけで、菅原教授が退官なさってしまうそうで。先生には就職の時のゴタゴタ等、色々と御面倒をおかけしたこともありました。

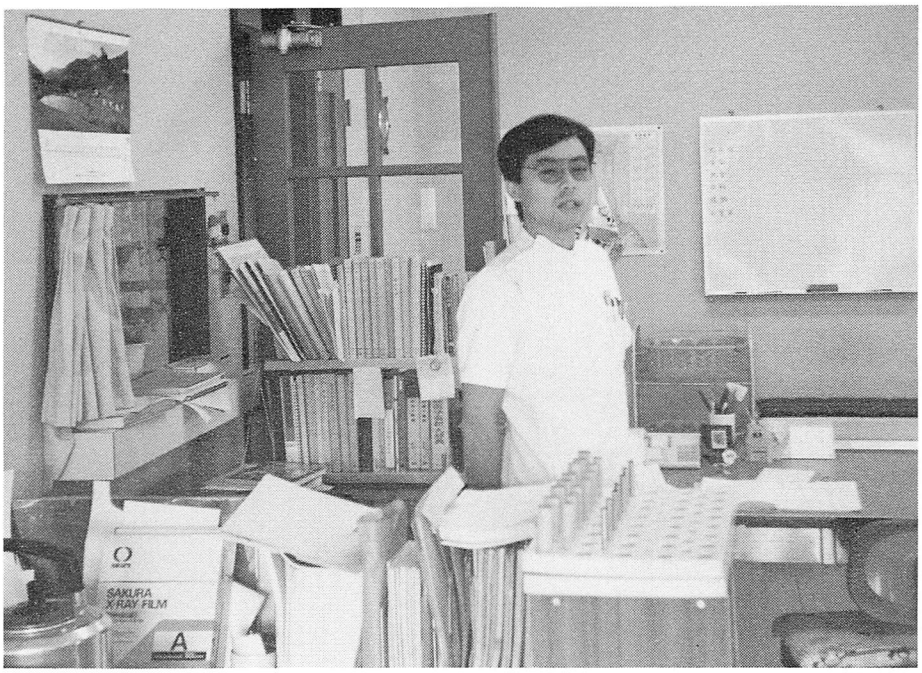
それにしても、窓にもたれながら、入口に向かってする講義、なつかしいです。もう一度受けてみたい気がする今日このごろです。

三上一貴（所属：財団法人鳴海研究所清明会鳴海病院）

菅原先生　長い間ご苦労様でした。

在学中だけでなく卒業後も御指導いただき大変有難うございました。先生からはいろいろと教えていただきました。患者との接し方、X線の見方、カンファレンス、リハ回診、運動療法の技術などなどＰＴとしてだけでなく、男、人間としての生き方を学んだような気がします。結果的には報いることはできませんでしたが、“人に頼まれたら、可能な限りやってあげよう”このことはいつまでも実行していこうと思っています。私の披露宴の席で歌われた“金秋の　秋ぞ華ぐ　喜びを　永に留めん　愛のわすれそ”を忘れずに、二人三脚で明るい家庭を築いていきたいと思っています。先生はいつまでも私達の教授でありまたお会いできる日を楽しみにしています。

山本康博（所属：医療法人博進会南部病院）



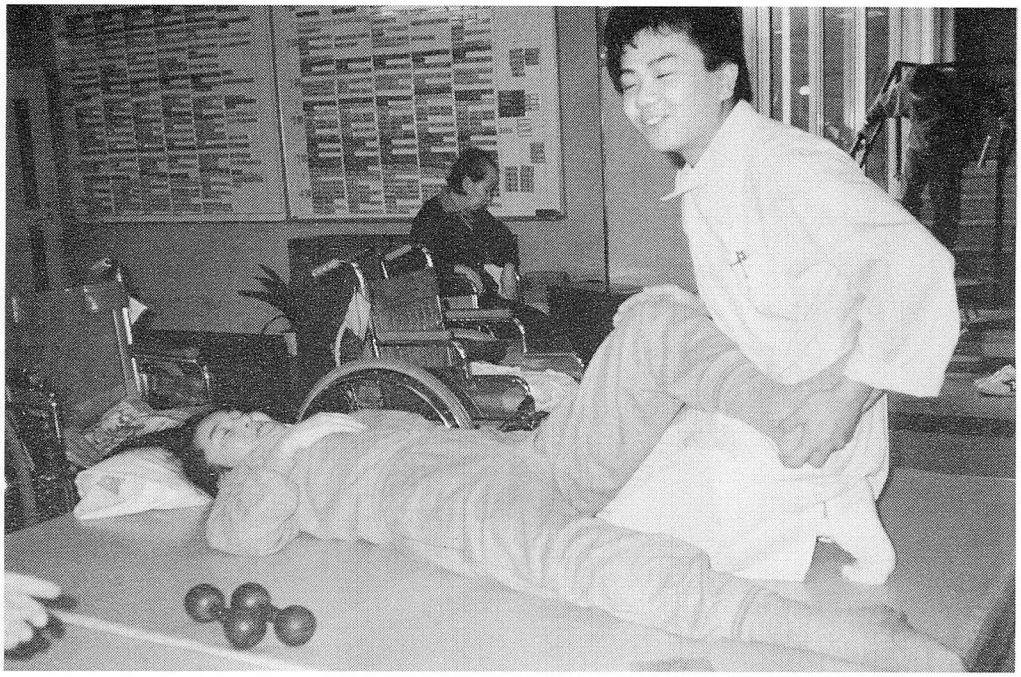
桜の花を楽しんで見られない人達もたくさんあります。そんな人の味方になれるのはあなたです。笑顔を作り出す仕事ができるように祈っています。

この文は、僕が短大を卒業する時に菅原先生が寄書きに書いて下さったものです。ＰＴとしての道に疑問を感じ、学校から遠ざっかていた僕を、立ち直らせて下さったのは菅原先生でした。その時先生は、『ただ、患者の為に』とだけ言われ、多くは語らなかったように記憶しています。

あれから４年余り。患者さんやその家族の方々から、『山本先生』と呼ばれるようにはなりましたが、『もっと患者さんの為に』と思う毎日です。先生が下さったこの文を忘れることなく、毎日を過ごしていきたいと思っています。菅原先生、長い間本当に御苦労様でした。そして、本当にありがとうございました。

Ⅳ　期　生

阿部雄彦（所属：財団法人太田総合病院附属熱海総合病院）



「常に問題意識を持って仕事に取り組め」と大学時代に教わった。現在私は、1日20数人の患者さんの訓練する毎日で、どうしたら患者さんが満足してくれるか（10分程度の訓練で満足してくれるはずがないのだが）と問題を抱え、「こんなはずじゃなかったのに」などと疑問を持てなくなってきた自分が情ないと思う。しかしながら、仕事がとても忙しいはずなのに、プライベートではやることはやっているという要領の良さは、大学時代も現在も変っていない。

ＰＴになって２年、接してきた患者さんに対しベストを尽くしてきた自分だが、この意気込みを常に持ち続けていきたい。そしてそうできる仕事「ＰＴ」になれて本当に良かったと思う。

新谷修一（所属：青森リハビリテーション病院）

［報告］青森市に来て、２度目の冬が到来というより、襲来。２月までは雪が少なく、青森も住みやすいなァと思っていたのも束の間、２月に入ってからというもの、ドカ雪、メチャ雪で、除雪をするにも場所がなく、捨てる場所を探している毎日。今ではスノーダンプが私の友達です。シベリアの風に吹かれて、まだ降るのかとため息をつきながら、日本海をにらみつけている自分の姿が、ここにあるのでした。

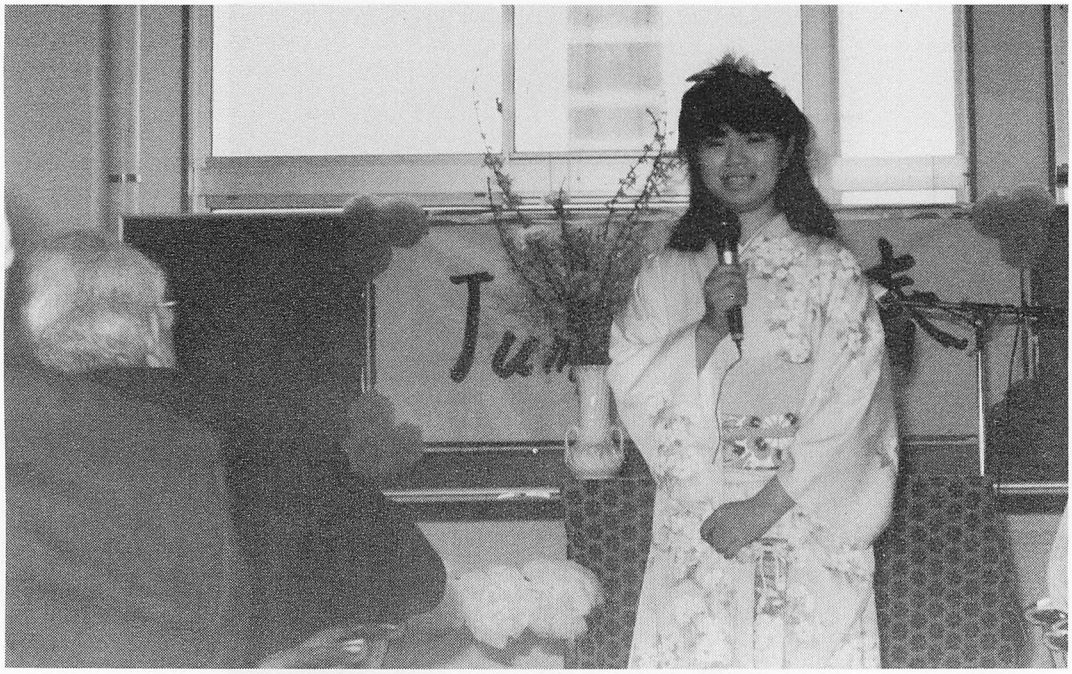
［想い出］菅原教授といえば、右から板書していく姿が頭に浮かび、話を聞いていなければその達筆の縦書きの文字は、分らなくなってしまうという特徴がありました。それもこれも今思えば、先生が学生のことを考え、わざと分りづらい（？）字を書いていて下さったのでしょう。菅原先生、退官後もお体には十分にお気をつけ下さい。

阿多由実（旧姓：石崎）（所属：帝京大学医学部附属溝口病院）

菅原先生との思い出といえば、よく言い争いをしたということでしょうか。何の事についてかは忘れてしまいましたが、よく私は先生にくってかかったものでした。講義中に怒鳴られたのも４期生の中では私だけではなかったかと思います。しかし、意外にも嫌な印象はなく、思い浮かぶ先生の顔はいつも豪快な笑顔に包まれていらっしゃいます。今年退官されたとのことで、遂に先生も隠居され日がな一日をのんびり過ごされるのかと思いきやまだまだ病院勤めを続けられるとのこと。この調子では当分“ボケ”の心配は無用ですね。人生80余、「サンドイッチマン」の歌声は私達が立派な理学療法士になれるその日まで高らかになり響いて欲しいものです。

私は今年、愛する人のもとへ嫁ぎましたが主婦業と仕事を両立するということの大変さを身をもって体験しています。しかし、これを機会に理学療法士としてより一層人間性を高めていけたらと思っています。

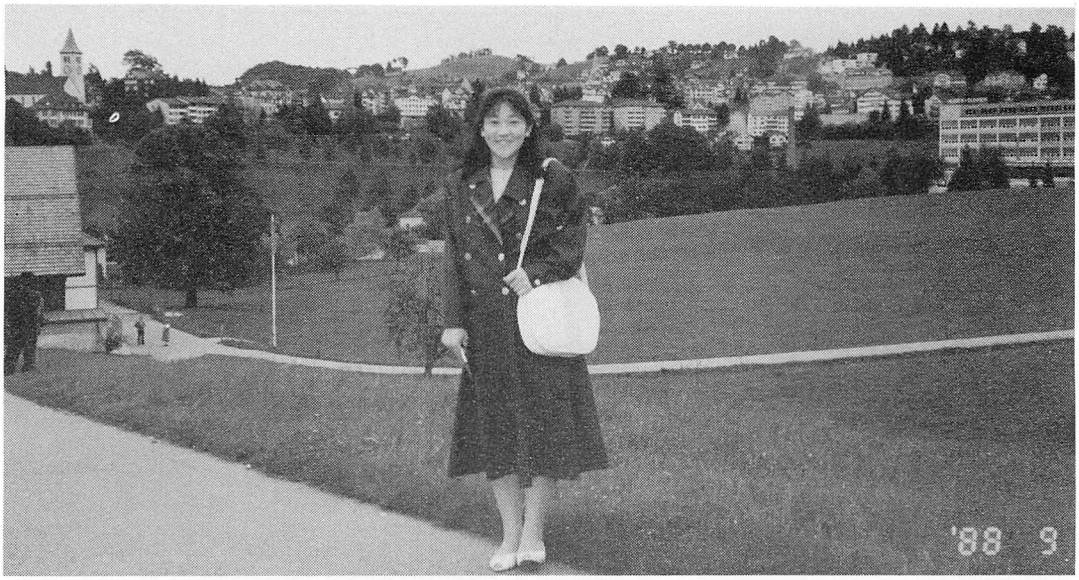
一戸美代子（所属：東京慈恵医科大学附属青戸分院）



親元を離れてもうすぐ2年がたちます。この2年間で淋しくてどうしようもなかったことが2度あります。いろいろな事が重なってすごく落込んでしまって、黙っていても涙が流れて止りません。無性に人恋しくなってしまう時ありませんか。そんな時、この歌がふと口をついて出てきました。「悲しいことがあると開く皮の表紙（ページ）、卒業写真のあの人はやさしい目をしてる」ユーミンのこの歌を周りのことなど気にせず、おもいっきり大声で歌って歌の通り卒業アルバムを開いてみました。「病める身を癒すは心ありてこそ、みずから進み愛を与えよ」という菅原先生の言葉、皆の笑顔、そして私の笑顔。何かいっぺんにふっきれてしまって。悩んでいてもしょうがないのです。前向きに生きねば。昔のことを振返っていてはいけないのですが、やっぱりあの時代は私の宝です。

1988.2.20

今　千佳子（所属：国立療養所青森病院）



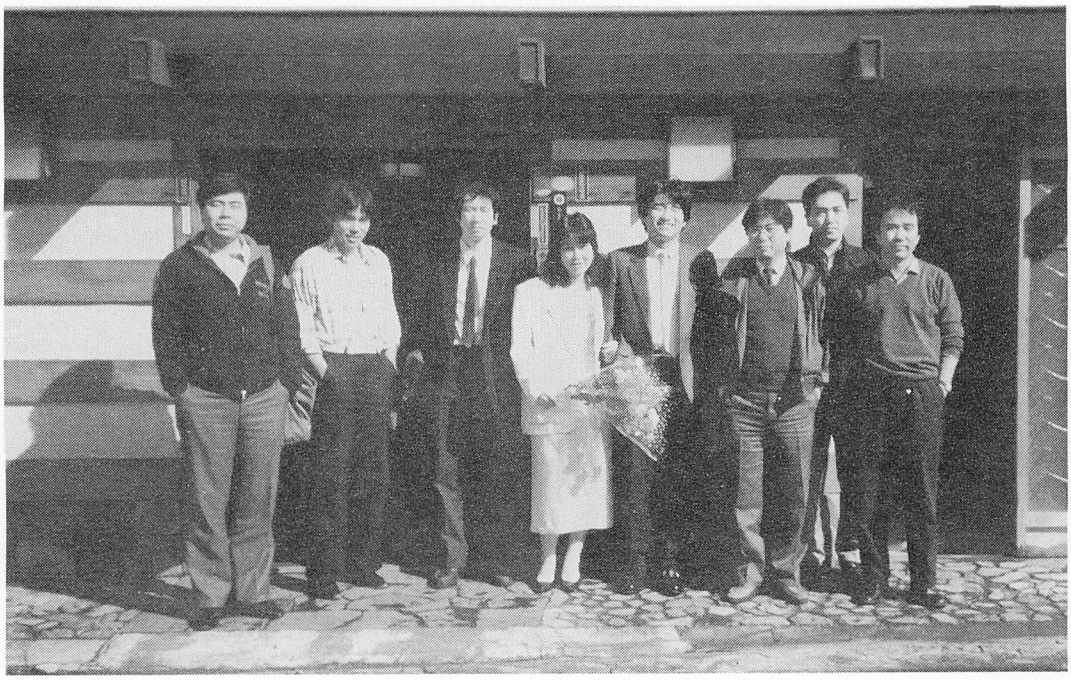
菅原先生、無事に退官を迎えおめでとうございます。退官記念誌なのでそれらしい思い出などを書けばよいのでしょうが、それは皆さんにおまかせして、私の近況報告をさせてもらいます。

菅原先生が退官された頃、私はようやく迎えた社会人３年目も、惰性で過ごす毎日でした。ここで思いたって青森県の事業である青年海外派遣事業というものに申し込み、そして、ヨーロッパ５カ国への研修旅行に参加しました。見るもの全てが新しい世界のように思われ、大変有意義な旅行でしたが、その中で半日だけですが、福祉施設の視察ということでオランダの福祉制度に触れることができました。私が行ったところは、老人のコミュニティセンターのような所でした。その中の一つに、『オランダは、何年か前には郊外に老人ホームを作り、そこに老人を集めればいいという考え方だったが、それではだめだという事で、現在は町の中にセンターを設け、そこで老人たちが集い、憩いの場を見つけたり、また生きがいを見いだしたり、さらに、悩みの相談などを行っていました。在宅へのサービスとして、食事のサービスなども行っているそうです。それらが、ボランティアの人々の助けにより成り立っている』ということがありました。日本ではボランティアというものはまだまだ特別なイメージがありますが、欧州の国々では、明日の我が身を思い自分のできる範囲の中で、さりげなく、だけれども誠心誠意真心をこめてボランティア活動をしているように思われました。私たちの仕事というものとボランティアとを比較するわけにはいきませんが、気持ちの中で参考にする部分があるように思われました。

ＰＴになって３年目、これを機会に初心を振り返り、少なくなりかけていた、菅原先生にほめられた笑顔を、もう少し優しく患者や周囲の人々に向けられるようにしたいと思います。

菅原先生には、これからも機会あるごとに御指導いただかなければならないと思います。今後ともよろしくお願いします。

謝花芳治（所属：近畿大学医学部附属病院）



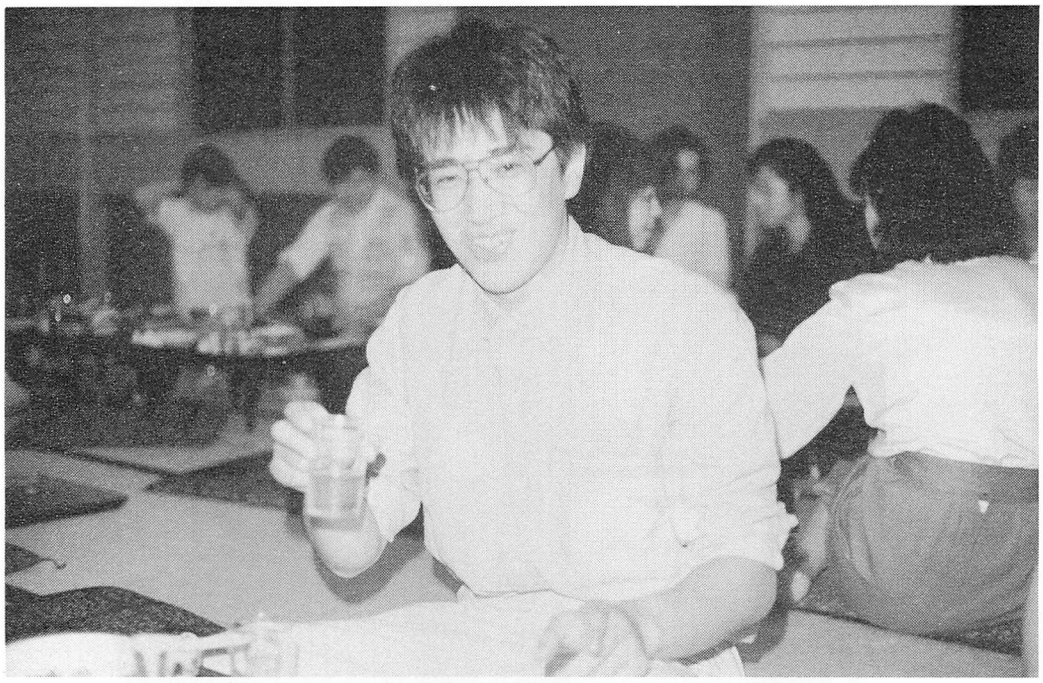
菅原先生、弘前大学医療技術短期大学部でのご教鞭御苦労様でした。

思い出すと6年前に弘前に来て、環境、風習など大阪とは大分違い困惑しました。しかし、素晴らしい先生方、友達に恵まれ、本当に実りのある3年間でした。

菅原先生のはじめの授業の中で「当たり前のことを当たり前に出来る人間になりなさい」と言い、私は初めどういうことなのかわからずにいました。それからそのことを考えて日々暮らしていくと、当たり前にすることが年をとるといやになることがあり、先生の話を思い出して奮起することがしばしばあります。

これからも先生の言ったいろいろな言葉を胸におさめ、臨床に努めます。

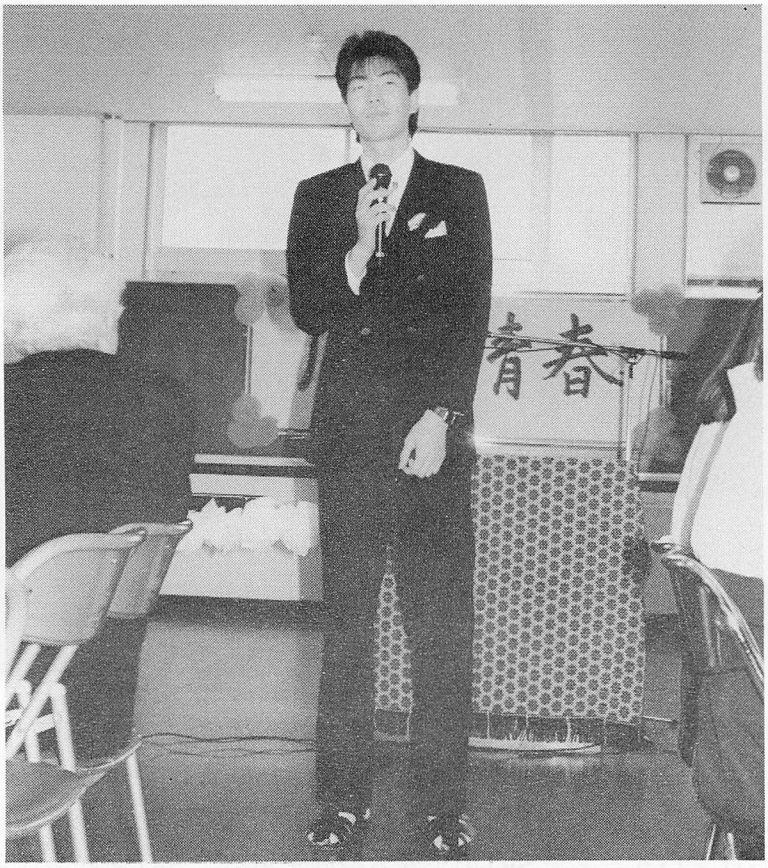
高見彰淑（所属：秋田県立脳血管研究センター）



弘前時代に何をやったかと考えても、特に浮かんでこないが、強いて挙げるならスキー同好会の創設であろう。これは、2年生の秋に冗談で友人に「SKI CLUBを結成して、GALとAFTER SKIをやりたい。」と言ったところ、無理だと言われ、それならばということでSKIのできる仲間を集め、SKI愛好会（会員約20名）を結成し、翌年時に短大に申請してSKI同好会が初めて創設された（会員数約30名）。初代会長の私としては、現在同好会が存続しているか心配である。

現在は研究施設内の病院部門で働いているため、環境としては、特徴的であり且つ自由な時間が多いので、勉強しやすい所でありますが、本人がもう少し意欲をだせば良いと自分自身思っております。

館山智格（所属：五所川原市立西北中央病院）



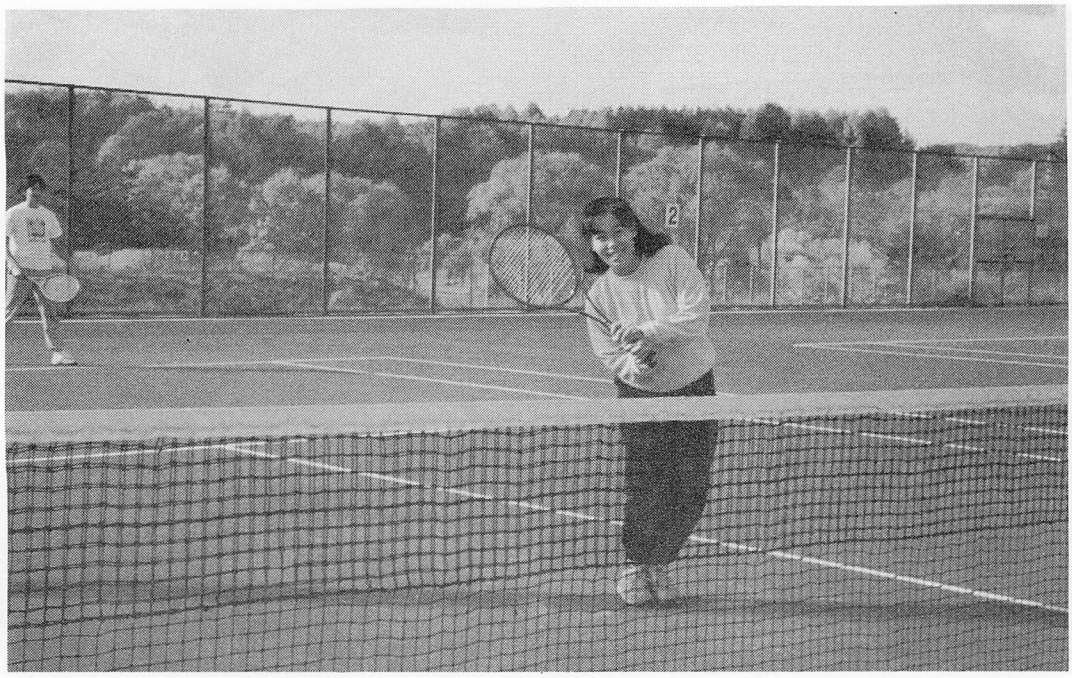
弘前大学医療技術短期大学部理学療法学科第４期卒業の館山です。現在、五所川原市立西北中央病院に勤務しております。なんとなく弘大名物「出身！」を思い出すような書き出しなんですけれども、すぐにコンパを思い出す私はやはり理学療法学科卒ですね。

私が思うに、理学療法学科は学ぶべきときには学び、遊ぶべきときには遊ぶといった何事にも力を注ぐ、そんな学科だった気がします。そんな学科になれたのも、菅原教授はじめ先生方の人間性の良さにあったと思います。そんな中で、学生時分より「歌って踊れるＰＴ」を目指していた私ですが、まだ最後の「ＰＴ」を満足させる域に達していない状態です。これからこの「ＰＴ」になれるよう努力していきたいと思っております。

内藤昭浩（所属：新潟大学医学部附属病院）

まずは、我々できの悪い学生（特に学籍番号83PT16番こと、内藤昭浩）に何かと御教授していただきありがとうございました。現在私は新潟大学医学部附属病院に勤務しております。地元に帰ってきてから、2年経とうとしております。やっと自分なりのＰＴ像が見えてきた気がします（とは言っても菅原先生の長年にわたる御研究に比べれば、小さな事かもしれませんが……）。あと1年の勤務をしてから、もっと幅広くＰＴの仕事を見つめるために、他の病院等にも勤務したいと思っています。菅原先生の長年にわたる御研究等の業績を、私自身一生涯の目標にして、これからの仕事に取り組んでいきたいと思っています。本当に長い間、ありがとうございました。

中村彩子（所属：栃木県身体障害医療福祉センター）



春の桜に始り、雪の岩木山を望み、四季織りなす津軽で、3年間を過せたことは誇りに思う。

親元を離れ一人暮らしを始め、何もかも自由になり、大人としての興奮が冷めきれない時に、生きがいのある仕事を、ＰＴとは何ぞやと、深く考えれた時間を持てたことである。臨床に出て、多忙の毎日を過す中、壁にぶつかった時も、レポート、ノートを引張り出し、当時に戻る。津軽での時間は、青春の1コマにすぎないが、あの時感じたことは今なお思考中であり、臨床を続ける限り、結論の出ないテーマだと思う。

小児施設で働くようになって2年。子供たちが成長していく過程で、自分という存在が子供にどれくらい影響を与えられるのか、子供が成人しても忘れぬ存在になれるか、子供の POWER に負けぬよう、元気印の毎日である。

松沼文男（所属：はんなさわらび学園）

弘前は私にとっても私の家族にとっても忘れることのできない所です。楽しいことよりもつらいことの方が多かったあの頃。群馬に帰ってからもしばらくの間は、妻も子供たちも弘前の話題が出ると顔が曇った程です。自分たちで選んだ道とはいえ、知人も殆どいない全くの知らない土地で生活するのは不安でいっぱいでした。子供が病気になった時など、妻が仕事のため私が授業を休んで看病したのが思い出されます。具合が悪くなるのが決って試験の直前で、ノートを片手に看病したのも今となっては良い思い出です。また特に思い出に残っているのは、屋根の雪降ろし。半日がかりで雪を降ろし、その雪を空き地まで何往復もして捨てに行き、明くる日は決って風邪をひいたこと。しかし、嬉しいこともありました。津軽の文化歴史を知ったこと、温泉が沢山あったこと、友人知人が沢山できたことなど。最近は楽しかったことばかり思い出され、近いうちに行ってみたいと話し合う今日この頃です。

楠美有理（所属：国立療養所松丘保養園）

昭和62年４月より松丘保養園に勤務してから、既に１年が経とうとしています。この間、「己の無知さ」と「一人職場」という二つの重圧（？）にも負けず頑張ってきました。以前抱いていたハンセン氏病患者像があまりにも非現実的だったために、逆にさしたる偏見もなく受容できたように思います。昭和63年春の機能訓練棟完成後は、高齢化著しい当園患者の機能維持・向上のため更に頑張るつもりです（まずは自己研磨、かな？）。

個人的には学生時代の「こたつぶた」からは想像できないほど精力的に遊んでいます。学生時代の運動不足をこの機会に取り戻したい一心からでしょうか、今の時期はスキーと室内スポーツ（ビリヤード等）ですが、春からは社交ダンスも始める予定です（お金があればの話ですが……）。当分結婚話もないでしょうし、趣味を広げるために「５時から女」に徹しようかな……などと考える私です。

藤田茂子（旧姓：佐々木）（所属：青森県立さわらび園）

長くて短かった4年間（？）の短大生活、そして卒業後も菅原教授には御心配ばかりかけて、申し訳なく思うと同時に大変感謝しております。

短大生活の中で一番の思い出は、とあるコンパの席で菅原先生が「出身！」をやって下さった時のことです。「弘前大学医療技術短期大学部理学療法学科特待生」とおっしゃったこと。「出身」の後、金沢先輩に脈を取ってもらっていたこと。その時の楽しそうなお顔がとても印象的でした。

私は現在重度肢体不自由児施設で働いています。子供たちの言動に一喜一憂しながら、菅原教授のお言葉を胸に、頑張って行きたいと思っています。

苦しみも悲しみもまた耐え得るは
君をたよれる人あればこそ

佐藤比呂子（所属：医療法人ときわ会ときわ会病院）

まずは、菅原先生、無事御退官おめでとうございます。

思い起こせば、先生と初めて出会ったのは私がやっとはたちになった春、希望に胸ふくらませ短大の門をくぐったあの日でした。それからもう6年もの歳月が流れるなんて……。

学生時代は、解剖学などというなんともお堅い授業を受け“教授”そのものの印象でしたが、三年制の学生を4年もやり続けると自然にその印象もやわらいで、卒業後も社会人として接するに及びそれはもう身近な人となりつつありました。訓練の合間に一服……と思い部屋に戻ると、診察にいらいらした先生がお茶を飲みながらお菓子をつまんで ― あの、先生のうれしそうな顔を見るだけで、何ともいえないホッとした気分になってしまうのです。これを書きながら、またホッとしてしまう私でした。

V　期　生

相坂隆之（所属：公立七戸病院）

医療短大を卒業し、一年が過ぎようとしています。この一年を振り返ってみると反省する点ばかりが多く、毎日毎日の仕事に振り回されているうちに一年が過ぎてしまったような気がします。

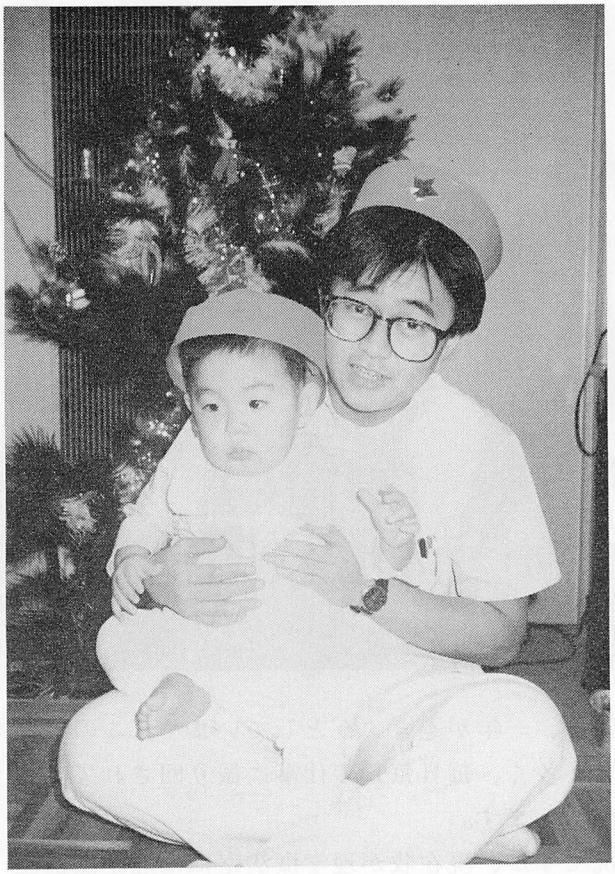
さて、私の近況ですが、現在我が理学療法室には理学療法士一人、柔道整復師一人の計２名のスタッフがおり、一日におよそ50名の患者を、扱っています。私の担当は、主に入院患者で一日およそ25名で毎日忙しくかけずりまわっている次第です。

次に短大時代の思い出ですが、これは数多くあり、なんといっても良き友達に恵まれパチンコ、マージャン等の社会勉強にあけくれる毎日であったことです。

そのためか菅原先生の試験では追試が多く、かなり御迷惑を、おかけしたような記憶が残っています。

菅原先生、本当に長い間御苦労さまでした。

石田秀雄（所属：社会福祉法人恩賜財団東京都済生会中央病院）



菅原教授。いや、菅じいお元気でしょうか。私は、元気で頑張ってます。

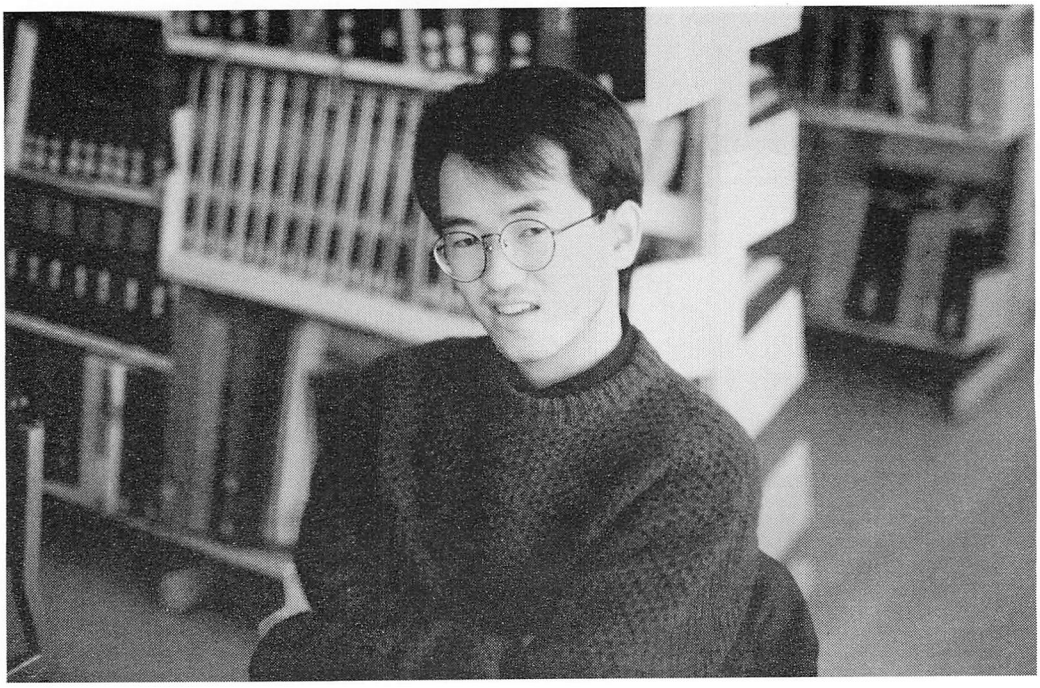
東京は、田舎育ちの私にはなかなか馴染めないところで、すぐ近くに六本木や新宿のネオンが待っているのですが、なぜか地味に暮らしています。

そんなためか、ねぶたやお城の桜がなつかしく思うことも度々ですが、その都度卒業式で頂いた色紙を見てホッとさせられます。仕事はというと、なんとか一年やってこれたようです。

今、私は夜学に通うため受験の目前で、これも参考書に囲まれて書いています。（しかし、なぜか足はネオン街に向いています。）進学は医短時代からの希望で、大きな目標の１ステップだと思っていますので、なんとしても合格したいのですが……。

それでは、いつまでもお元気で、退官後も暖かく・厳しく見守っていてください。

遠藤武秀（所属：社会福祉法人恩賜財団済生会山形済生病院）

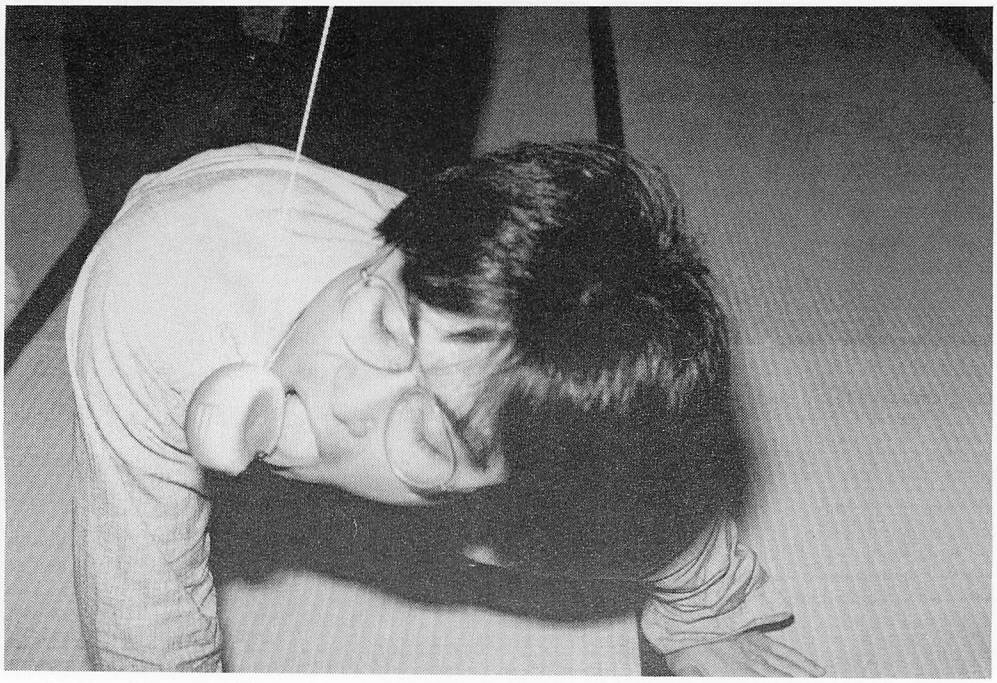


みなさん、こんにちは。84PT03の遠藤武秀です。私は、2月現在弘前にいます。山形県山形市出身で、昨年社会福祉法人恩賜財団済生会山形済生病院に就職した私がなぜ今弘前にいるのかというと、それは国試に落ちたからです。昨年はそのためにいろいろな面で肩身のせまい思いをしてきましたので、とにかく今年は絶対に決めるつもりでがんばっています。

写真は、医短の図書館で一応勉強しているところを後輩にとってもらったものです。84PTの方々は、またあいつは勉強もしないで朝日会館でパチンコしているんだろうと思っているかも知れませんが、それは昨年の私で今年は違います。毎日まじめに図書館に通っています。

最後になりましたが、菅原教授8年間本当に御苦労様でした。菅原教授の今後の益々の御推進とご健康をお祈りしています。

小山内康夫（所属：医療法人社団日鋼記念病院）



私の住む町と現在の私生活についてちょこっと書いてみます。暇な人は読んで下さい。

私の町は不況のど真ん中にある鉄の町室蘭です。町を歩けば10代・20代のギャルがいない、会うのはおじさん・おばさんばかり、それもちらほらです。セーラー服を着た学生を見た時は思わず手が自然とガッツポーズを取っていました。ちょっと言いすぎがありますが、それほど地名の割には活気のない所です。そんな不景気と陰気くさい話ばかり飛び交う中で、忙しくて、一番儲けていると言われている日鋼記念病院で働かさせていただいています。でも私は、恥ずかしい話ですが、仕事も遊びも中途半端で、仕事が終われば寮に帰り、夕食を食べ、風呂に入り、テレビを見て気が向くとちょっと酒を飲んで寝てしまうという、じじくさい生活をしている日々が多い様な気がします。もっと若者らしい生活をと思いながら報告終わり。

河原優美子（所属：津軽保健生活協同組合健生病院）

臨床にでて、早一年。今、患者さんを目の前にして悩む時、窓際に立って穏やかな声でボソボソと話される、菅原教授の姿を思い出します。

近視で板書が取りにくいため、階段教室の窓際最前列を指定席のようにしていた私のノートには、菅原教授の話された言葉が、あちこちに落書きしてあります。授業中も、“面白くない”とたてついたり、実習中、帰りの汽車の中で思いの丈をぶつけてみたり、また、卒論でも、“貴様何様のつもりだ……”と叱られるまで議論したこと、などなど、若気の至り、今思うと、赤くなったり、青くなったりするようなことも、良き思い出となりました。

今、患者さんを目の前にして悩む時、ノートの落書きを読みながら、悩むことを忘れたら、ＰＴ失格だ、といいきかせている今日この頃です。

菊池美保子（社会保険埼玉中央病院）

私の勤務している病院の訓練室からは、時々、ボーッと富士山が見えます。朝が一番よく見えてきれいですが、夕方、夕陽をバックに影絵のように写し出される姿もまた格別です。ほとんどいつも周りに山々は見えず、時々姿を現す富士山や他の山々を見ては、自分が埼玉にいることを実感し、また弘前で岩木山がきれいに見えたことを思い出します。雪で真っ白な岩木山、公園の桜の後方に雄大にそびえる岩木山などなど……。岩木山を思い出すと、今度は弘前でのいろいろなことが思い出されます。そんなことを思い出していると、日頃時に流されてばかりいる私は、これでいいのだろうかと考えてしまいます。学生時代考えていたＰＴ像と現在の私。理想と現実といえども、『初心忘れるべからず』という言葉を強く感じている今日この頃です。

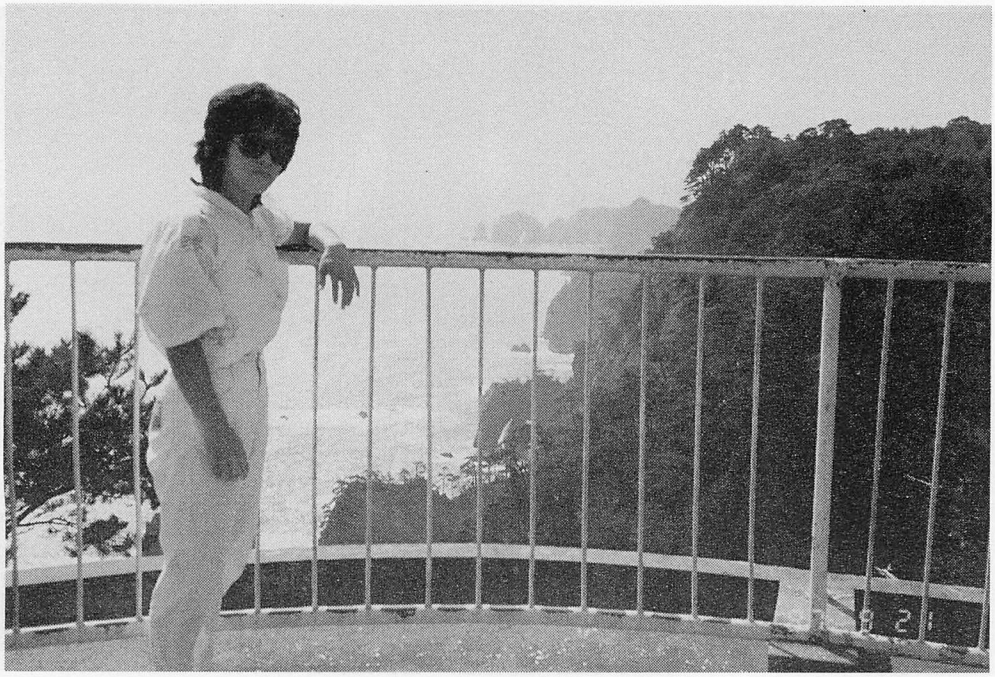
桜井康徳（所属：国立栃木病院）

ＰＴ１年目の私ですが、最近のある出来事を簡単に報告したいと思います。

１月下旬、山にも雪がたくさん積もりスキーをするためでかけていったある日、なんとそこで転倒し右膝を捻挫してしまったのです。その後待っていたのは、ギプス固定という障害者体験の日々でした。なにしろ右膝を伸展位で固定されてしまったのですから、その間の生活は“不便”の２文字につきます。

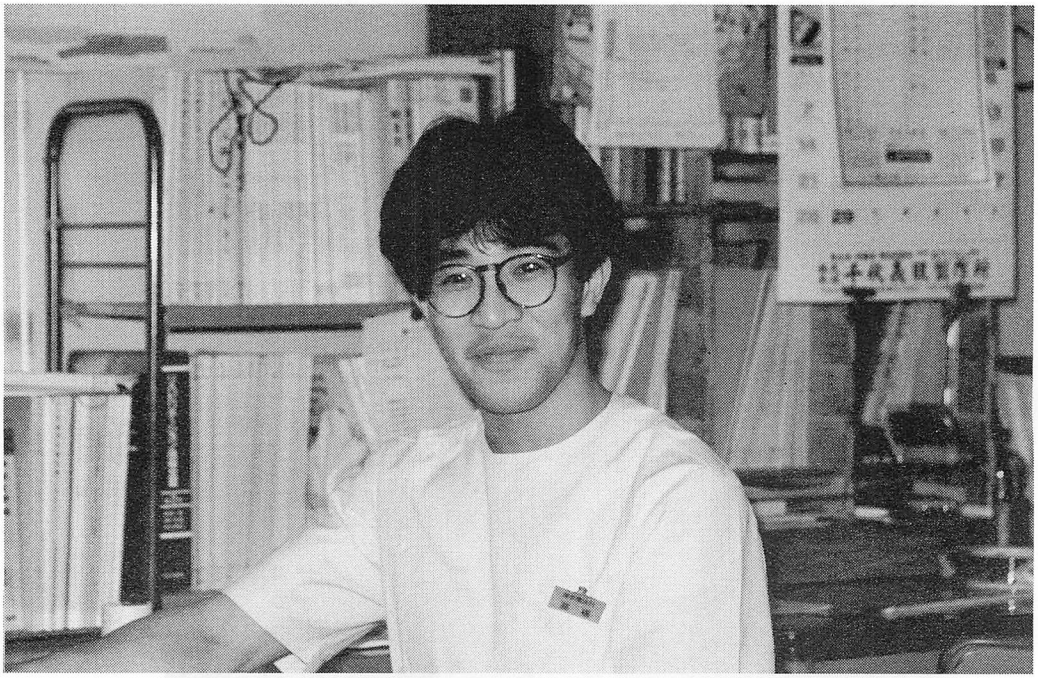
この事で、私は膝の屈曲不可ということがＡＤＬ上いかに困難なことが多いか身をもって体験したわけです。ＰＴとしてこの体験は貴重なものでしたが、もう二度とギプスなど巻かれたくないというのが実感です。ＰＴ１年目にしてとんだドジをふんでしまった私ですが、今後色々なことを体験し、ＰＴとしても人間としても成長したいと思います。

須藤恵理子（所属：公立金木病院）



近況報告いたします。最近、特に津軽弁にみがきがかかり、自分ながら驚いています。元々、津軽生まれで津軽育ちの私にとっては、津軽弁はきるにきれない関係なのですが、学生時代は少し、なりをひそめていました。それが、金木町の雰囲気に慣れ、（とはいっても地吹雪にはなじみません。）患者さん、特に御老人とのコミュニケーションになれたためか、さらにクラシックな津軽弁が話せるようになりました。時々、困るのが、長距離電話。標準語が出てこない。イントネーションが、直せない。この頃は、少し開き直り、津軽弁だって日本語、“吉幾三”だって、“伊奈かっぺい”だって堂々と使っている。意味さえ通じればいいじゃないかと思っています。患者さんとの会話の中で、津軽弁の持つ微妙なニュアンスを大切にしたいと思っています。

高橋尚人（所属：秋田県厚生連仙北組合総合病院）



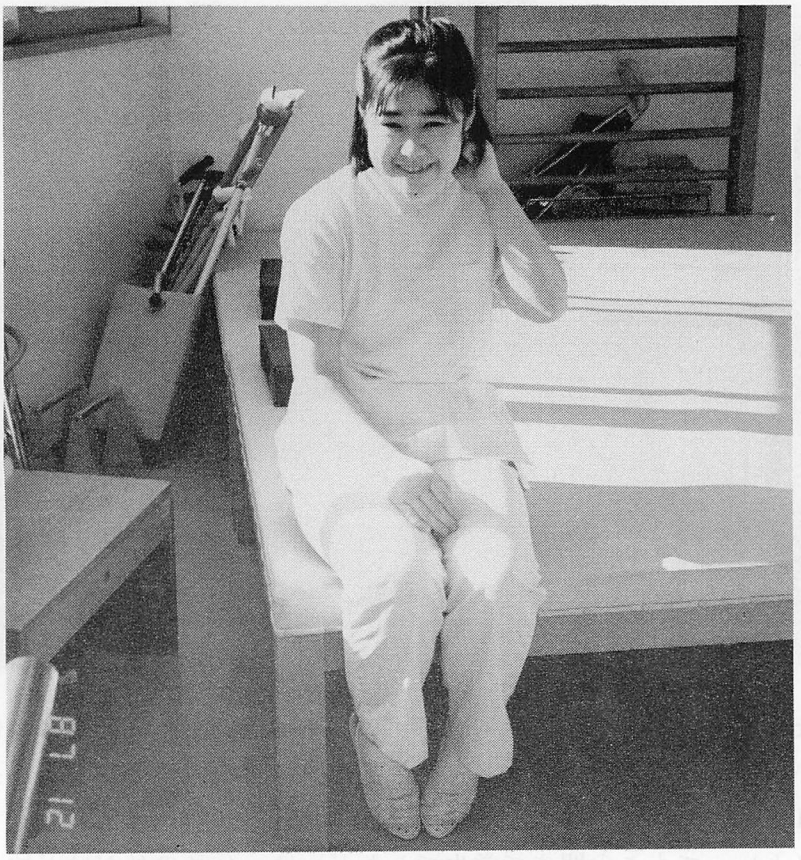
社会人になってもう１年が過ぎようとしていますが、ようやく仕事にも慣れて一人前の仕事が出来る様になってきました。最近は、学会発表やスキー等と公私ともに忙しい毎日です。

学生時代（といってもこの間まで学生でしたが）は、公私の私だけが忙しかった様な感じです。しかし自分の周囲のあまりの環境の変化でずっと昔の事の様な気がします。

２年目も、弘前に住んでいた事（初心）を忘れずに、患者さんに愛される理学療法士を目指して自分を見つめていきたいと考えています。

私は秋田県に末永くお世話になりますのでよろしくお願い致します。

館山祐子（所属：医療法人社団康陽会中嶋病院）



仙台にも珍しく雪が積もった夜、歩いていると、道路に雪の降ってくる影が映っていることを発見しました。そして、弘前にいた時、寒沢浴場への行き帰りに、よく橋の上で雪の降ってくる影を見たっけ……、なんて思い出しました。

だから……、というわけではありませんが、5月から習い始め、クレジットを組んで買ってしまったエレクトーンで、今「雪国」を練習中です。去年の雪燈籠祭りの時、本物の吉幾三さんの歌うこの曲を聞いて、とても感動したことを覚えています。

あんなことがあった、こんなことがあったと、思い出すことは沢山ありますが、それを強烈にするのは気候とか風景などの印象なのではないかと思います。弘前という印象の強い土地で、友人の優しさ、先生の親心、3年間住んだ佐々木学生荘の家主である老夫婦のあたたかさなどに触れることができたことを、今更のように嬉しく思っています。

田畑　稔（所属：社会福祉法人恩賜財団東京都済生会中央病院）

菅原先生お元気でしょうか？今回の先生の退官記念事業に参加できず申し訳ありません。僕も就職して約一年になりますが、なんとかクビにならず勤めさせていただいてます。この写真はご覧の通りでして、鍛冶町も短大のすぐ下にありましたが、六本木もまた病院より徒歩20分のところにあり、何故か飲むところには恵まれています。仕事の方は、週三回のカンファレンスやＣＣＵからリハビリと訓練前後で心電図を取ったりしています。脳卒中も「リハは救急から」ではありませんが抗凝固療法中からリハビリがスタートしますので昼休みもあまり満足にはありませんが、毎日がとても勉強になります。また、今年から病棟の改築や港区から委託される特養老人ホームの開設があり、院長の方針で特養ホームはリハビリを主体にするということになっています。自分のことばかりになりましたが、菅原先生も退官後はお体には十分に気をつけて下さい。

根岸映子（所属：医療法人伊勢崎佐波医師会病院）

大きな声では言えませんけど私、勉強が嫌いです。でも今、勉強しないと仕事が面白くなくなってくると、身にしみて感じています。

小さい時、字が読めるようになりたかったし、読めるようになると、嬉しくて片っ端から読んで回りました。数が数えられるようになれば、何でも数えて回って、それが楽しかった。学ぶことが楽しかったのは、いつ頃までだったでしょう。いつかしら、勉強の為の勉強になり、いつしか嫌いになりました。

わからない事だらけのまま過ごしてしまった1年。わからないままじゃつまらない。

勉強しなくちゃ、を通り過ぎて今、字が読みたいと思った時と同じような気持ちになっています。1年怠けて、本来学生が感じるべき気持ちを、今感じています。

来年の今頃は、平仮名くらい楽しく読んで回っていたいですね。

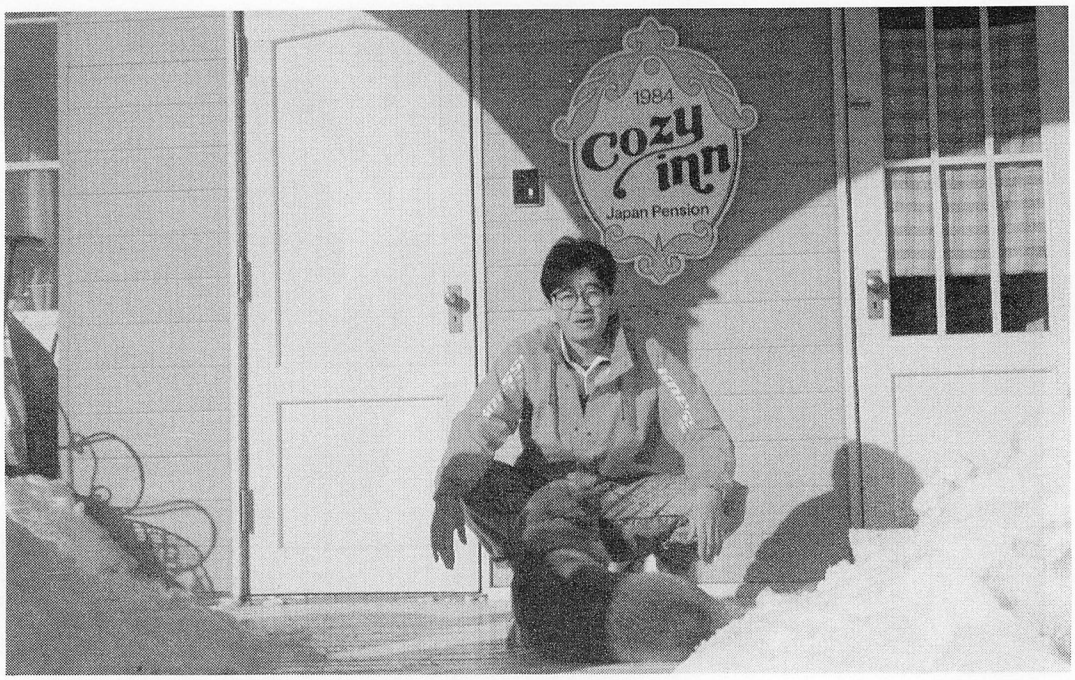
橋村尚樹（所属：長浜赤十字病院）

医療短大の思い出といえば、私にとっては弘前大学をやめての受験というのが一番大きい。自分には自分の決意（というほど大げさなものではないが）があってそうした。

今、理学療法士という仕事についてようやく一年が過ぎようとしている。学生時代に先生が言われていた『たかがＰＴ、されどＰＴ』という言葉を思い出す。患者数をこなしていくことにおわれたりして、たかがＰＴへと流れていきつつある。

もう一度、医療短大を受験した時の思いに立ち返ろう。そして、されどＰＴをかみしめることができるような仕事ができたらと思う。今年こそは、自分を誉めてやれるくらいがんばりたい。

古川雅一（所属：東京女子医科大学病院）



ＲＰＴになって早くも一年が過ぎようとしております。昨年の今頃は東京へ突然上京し、交番へ駆け込んで道を聞き回ったり、大勢の人の中を歩いて酔ったりで、到底馴染めるものではありませんでした。

しかし、最近では足取りも軽やかになり、東京の交通網なども少しずつ詳しくなっていることから都会人になってきたと内心自負しておりました。そう思ったのもつかの間、外部の職員の人たちが私の話す言葉に癖があると言い出し、突然、東北出身ですかと繰り出してきたのには自分自身とても驚いてしまいました。自分に自覚がないものですから（北海道出身のため標準語のつもり）なおさらのことです。

現在のところ、弘前で影響を受けたこれらのことやその他諸々を口の奥底へとっておきながら、東京でＰＴしています。

東京へ来る機会のある方はぜひ御一報下さい。御案内させて頂きますよ！

馬目芳具（所属：労働福祉事業団福島労災病院）

卒業して臨床の場に出るようになり、早くも一年と五ヶ月がたちました。いま、福島労災病院リハ科では、施設認定を受けるため、患者数を減らすとか、カルテをきちんと書くとか、ＲＰＴをもう一人募集するとか、その他諸々のことを技師長と先輩とが中心になり行われています。これから、ＲＰＴとＡＩＤの人達との間が難しくなってきそうです。一番若い私は、どう対処していったらよいか、不安に思っています。

仕事の方ですが、二年目に入り、自分より年上の患者に先生と呼ばれることが、つらく思えてきました。自分の知識のなさ、考えの浅さなど、いろいろなことで、自分のいい加減さが見えてきて、こんなことで良いのだろうかと、二年目にして感じはじめています。

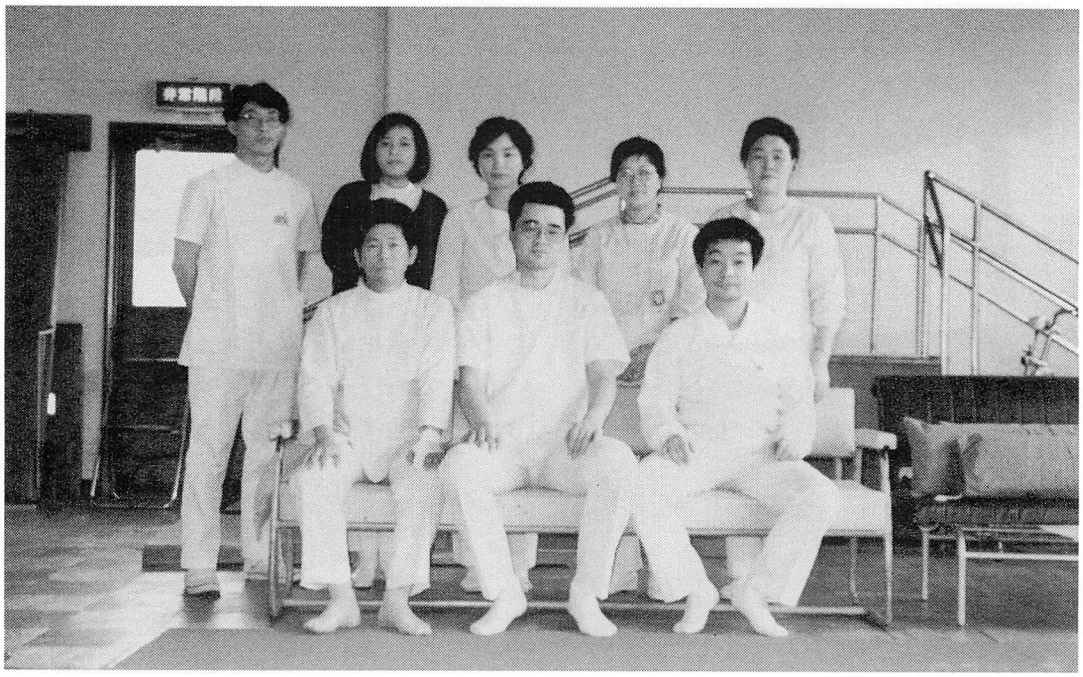
今、患者さんにとって一番大切なことは何かを考え、患者のため、又、自分のために、精進しようと思います。

宮川直美（所属：社会福祉法人浴風会病院）

突然ですが、私はボーッとしているのが好きです。この時の私の頭の中というのは、実に色々な想いや場面が共存しています。弘前ではうれしいことに、このボーッとする時間がたくさんもてた、と今にしてみれば思うわけで、落ち込んだ時、逆にすごくうれしいことがあった時、見晴らしのよいアパートの部屋の窓から朝日をながめるなんてよくあったことなのです。3年間、そんなことを繰り返しながら、少しだけ自分に素直になることを覚えたような気がします。

環境が変わって1年、私の3倍も4倍もの人生経験を持つ患者さん達と何故か同年令以下が殆どいない職場の人達に囲まれて、いい子でいようとした私は、自分を見失っていたようです。寮の部屋の窓から高速道路を見上げて、“何か変えたいな”とボーと考えている今日この頃です。

山平　斉（所属：秋田県厚生連由利組合総合病院）

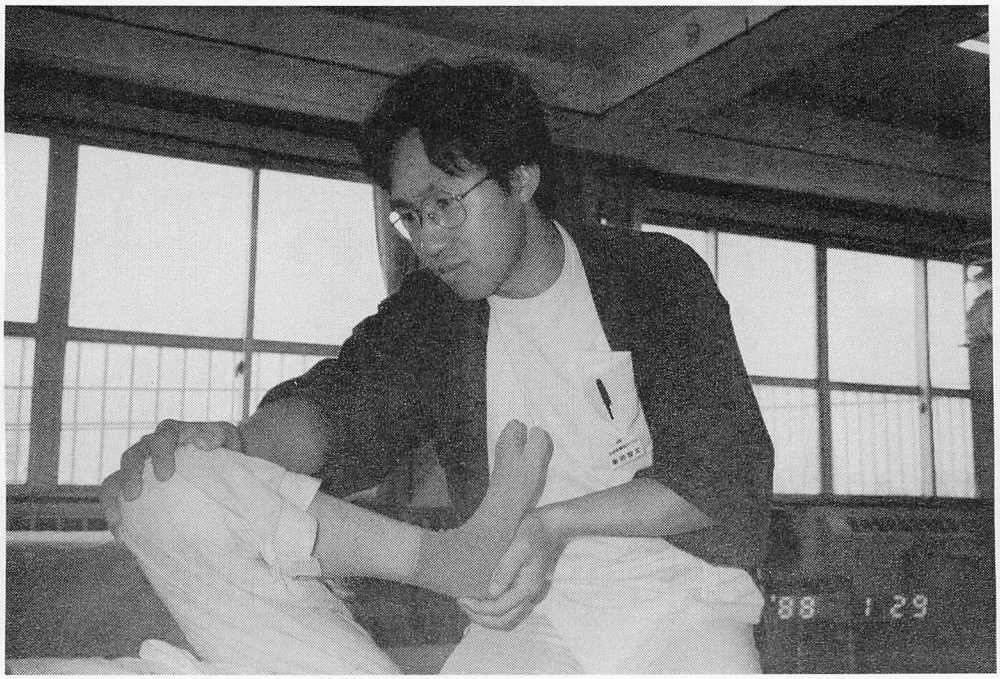


医短を卒業してはや1年が過ぎようとしていますが、先生方の講義を聞いていたのがつい先日のように感じられます。本荘の冬は弘前ほど雪は積もりません。しかし、金木の地吹雪に負けないくらいの強い風が吹き荒れています。

さて、菅原教授の講義といえば黒板の縦書きの文字ですが、初めのうちは横書きに直してノートをとるのが面倒に感じられたものでした。また、ウサギの解剖では菅原教授の鮮やかな手さばきに目をみはったものでした。

初めての病院実習の時には緊張のあまり全身汗だくになり、そのわりにはほとんど評価できなかったことが思い出されます。今ではその時ほど緊張することもなくなり、一日20人前後の評価・訓練する忙しい日々が続いています。

柴田智文（所属：医療生協宏和会中部病院）



今、医療・福祉の情勢は大変きびしくなっています。例えば、中間報告の話にしても、リハも含まれるが、医療のサービスを削り、患者さんのためにならないことをしています。

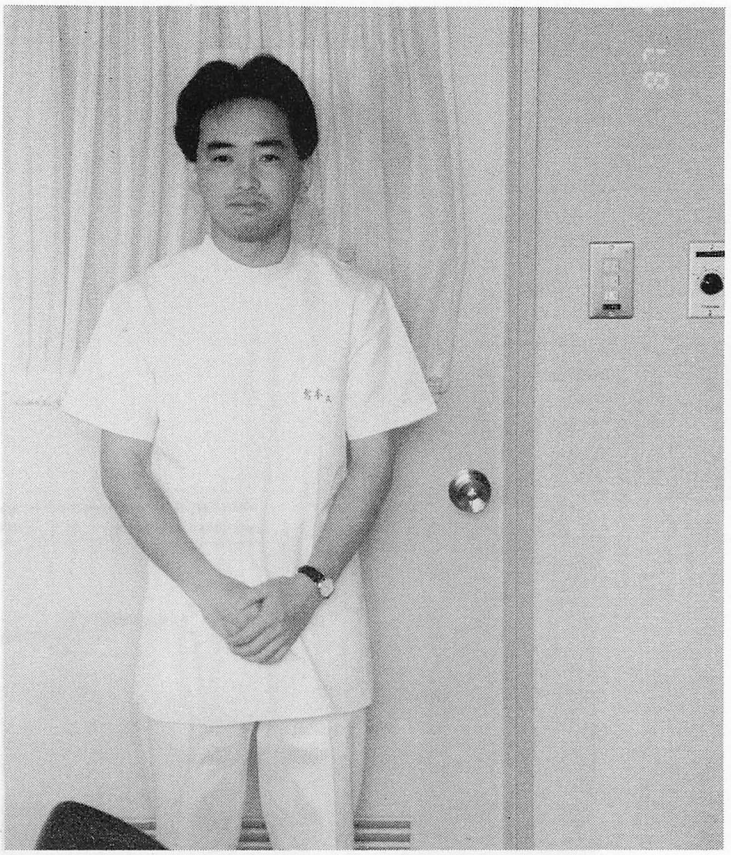
そのようなことに対して、我々みんなが反対していかなければいけないのに、その運動が盛り上がっていないのは、どういうわけであろう。ところで、最近、思うのですが、病む人と一緒にいると、リハビリテーションとは“全人間的復権”などといっていますが、そんな甘いものではなく、やっぱり、我々は常に“完全回復”を目指していくのが本当のリハだと思うようになってきた。今のリハ医学は障害は回復しないものだという前提で、みんなかっこよく議論しているだけで患者さんを直そうという方向には向いていない。このことは、最近のＰＴ・ＯＴのジャーナルでの賢い先生方の論文をみれば明らかである。

ともかく、患者さんのために、どうすればいいのか、日夜考えている毎日である。

田中智子（所属：医療法人明和会中通リハビリテーション病院）

学校を卒業してまだ１年もたってはいないのですが、私はどうしてもＰＴになりたくて医短を受験しました。実際、その時はＰＴがどんなことをするのかよく知らなかったと思います。それから、無事合格でき、勉強していくにしたがって、自分はＰＴになれるのかどうか自信がもてなくて、ＰＴになることをあきらめかけたことがあります。この時は、どうしてかＰＴになること以前に、自分には何もできることがないのではないかなどと、自分のことしか考えられず、精神的にも落ち込む一方で、先生方や友人達に大変心配をかけたことと思っています。今でこそ社会に出、人間としても、ＰＴとしてもまだまだ未熟ながら、明るく前向きに生きています。そして、学生時代の先生方や友人達との思い出はいつまでも大切にしたい私の宝物の一つです。

宮本久志（所属：諫早療育センター）

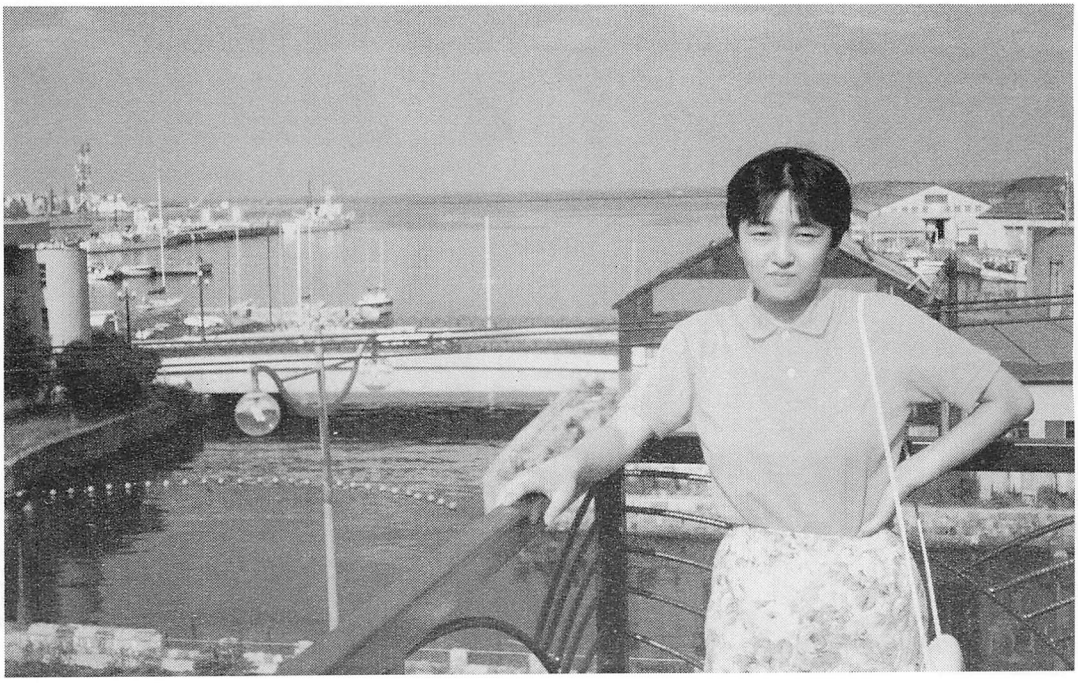


早いもので卒業して１年になろうとしています。就職して１年という見方もできるわけですが、この１年、何とか社会人してきました。４月に入って５月に主任になるという考えられない出世をした私は、学生を１年間余計にやるくらいの可山優三さんでした。名目主任ながらもＯＴ２人と３人でチームを組み科を開設し、重症児（者）の治療を行ってきました。技術、考え方共にまだまだというところです。職場では名前で呼ばれずオジサン扱いされていますが、唯一の独身男性ということで女性に囲まれ楽しいものです。でも実際は……？

学生時代、４年間も雪国にいながら１度もスキーをやらなかったことを今、後悔しています。今からやるにも九州には雪がありません。弘前は思い出深い土地です。たまには雪を見に行きたいと思っています。思い出作りに協力してくれた同窓生、教官、地元の方々に感謝しています。

Ⅵ　期　生

神山麻生（所属：医療法人恵誠会札幌恵北病院）



皆様、お元気でいらっしゃいますか。私は札幌のリゾート地とも呼ばれる茨戸という所で、毎日新鮮な空気を吸っています。冬は吹雪のため通勤不能とか……。

先日の国際リハ学会に、小野先生、藤田先生が来札され、久しぶりに同期の5人と先輩で集まる機会を得ました。今回は近況報告ということですが、今、私は少し空まわりの状態です。臨床にでて半年がたち、自分も、まわりも見まわす時間が、できたせいでしょうか。忙しいとか、疲れたとかいいながら、毎日、流されていくような、変にそれに慣れてしまうような、そうなってしまっては、怖いなと考えています。今の自分の状況が、どんなであろうと、卒業するときに、皆の前で話した気持ちを、忘れてはいけないなと思います。でもっでもっ！理想と現実って違うんですね。

もう少し、人間としてのcapacityが欲しい私です。わー……患者さんがマットで待っている。さぁ今日も頑張るぞォー。

菊池　香（所属：医療法人ときわ会ときわ会病院）

奈良さんに「書け、書け」とせかされて、この原稿を書いています。どうも文章を書くのが苦手で、1行書いてはボーッとして、1行書いてはお茶を飲んでいます。あっ、これで4行書いたことになります。Lucky! とまあ、行数稼ぎをしたところで本題に入っていきましょう。

菅原先生の想い出といったら、口ぐせとかサンドウィッチマンとかいっぱいありますが、私の1番の想い出は、2年の桜まつり、本丸でのワルツです。ワルツなんて踊ったことのない私はすっかり♫あなたのリードで……という調子でした。その時、優しいまなざしは、サンタクロースのようだと思ったのでした。と、わけのわからないことを書いてしまいましたが、こんな私を御指導下さって、どうもありがとうございました。いつまでもサンタクロースのような暖かいまなざしでいて下さい。

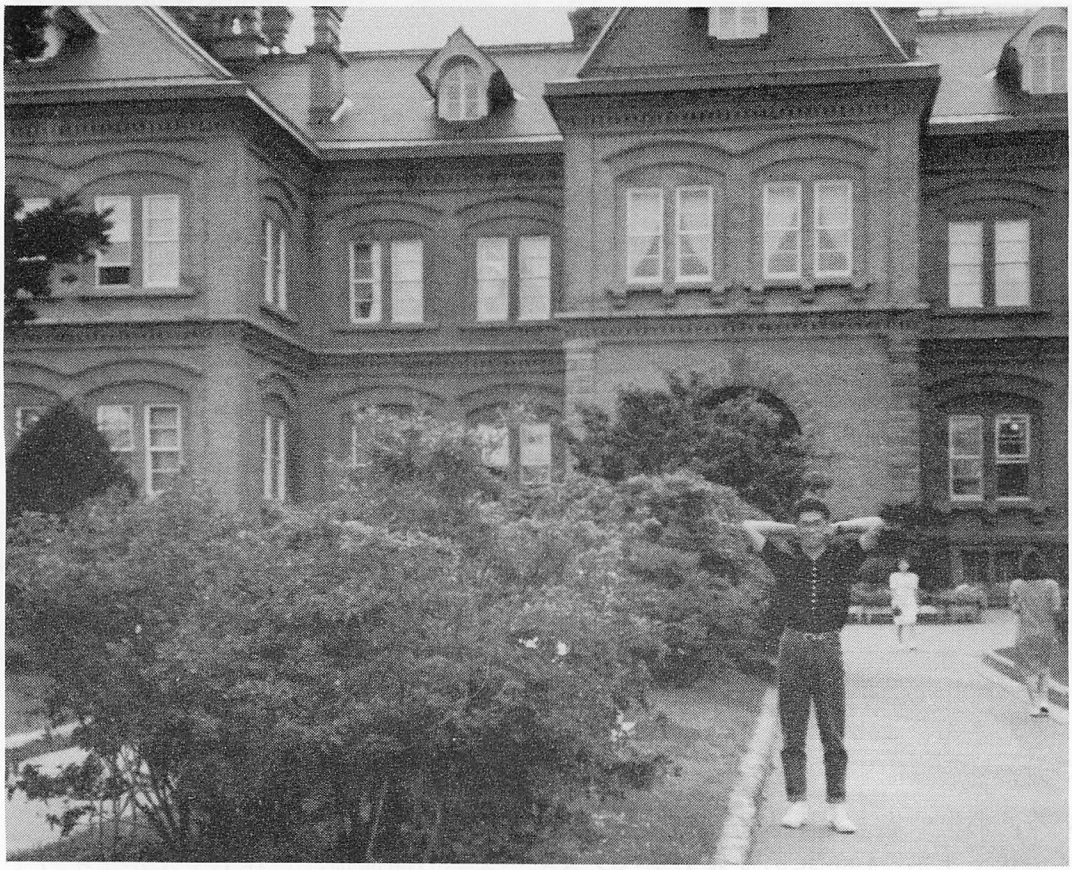
佐々木妙子（所属：社団医療法人鶯宿温泉病院）

みなさん、こんにちは。就職してひそかに痩せるのでは、と思っていたのですが、一向にその気配もなく、今ではこれ以上腕が逞しくならなければいいなと心配している６期生の佐々木です。

突然ですが、1993年の世界アルペンスキー大会の開催地、ご存じですか？そうです、それはかの有名な(？)雫石。私はこの雫石にある病院で働いています。山と緑に囲まれた、小高い丘の上にある白い建物で、野鳥の声を聞きながら、広くはありませんが窓のいっぱいある明るい訓練室という、とっても良い環境の中で患者さんと一緒に頑張っています。

“山と緑に囲まれた”というくらいだから、あまり忙しくないだろうと思う方もいらっしゃるでしょうが、なんのなんの。なんでこんなに忙しいのっ!!と思う程忙しいです。８月からはリハ相談（月２回）の担当となり、少々不安ですが、持ち前のパワーで、頑張るっきゃないと思っているところです。

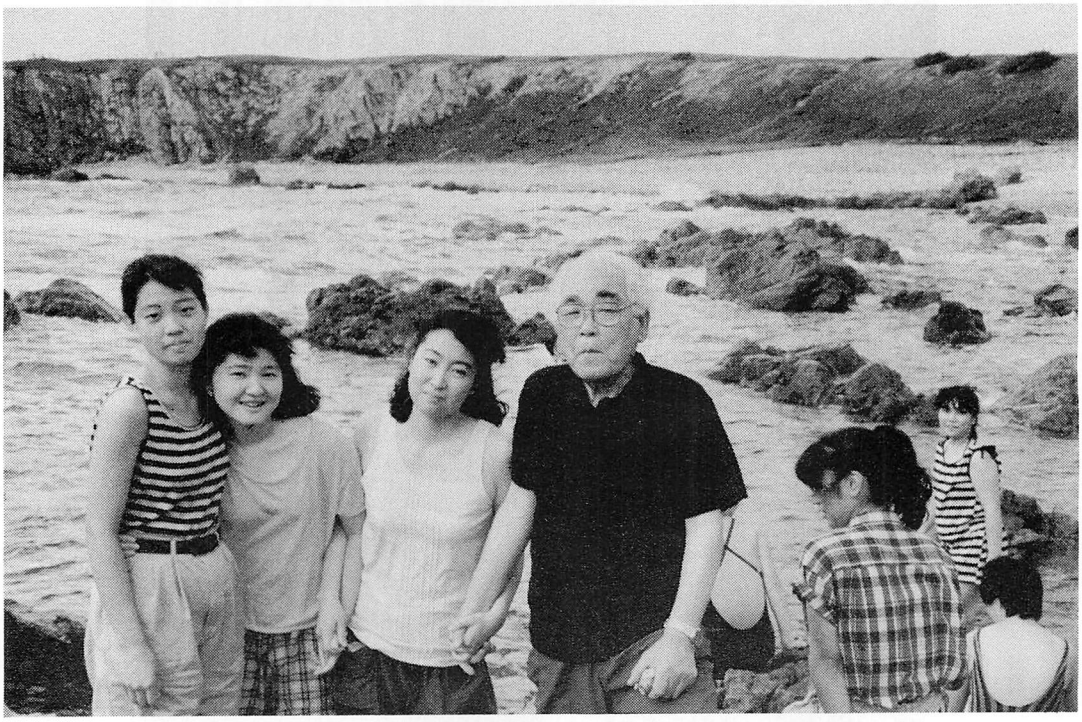
鈴木英樹（所属：北海道大学医学部附属病院）



三年間学んだ弘前を離れ早半年余り、現在私は北大病院で働いております。担当患者は10人前後ですが、その内容は多岐に渡り、毎日毎日、「自分の訓練は本当に患者のためになっているのか？」と自問自答しつつ頑張っています。臨床以外にも大学病院という性質上、研究の手伝いや準備など、和泉先生を初めとする諸先生のもと、充実した毎日を送っています。

国家試験に合格した際、私は嬉しくて御世話になった教官の方々に電話をしました。菅原教授とも話しましたが、その中で先生は「資格に溺れることなく常に患者から学ぶ姿勢を忘れるな」と話されました。今一度基本に戻り、この言葉を肝に命じて生きたいと思う、今日このごろです。

高橋　淳（所属：山の手通病院）



皆さん、お元気ですか？６期の高橋淳です。21年間住み慣れた弘前の自宅を勝手に飛び出し、北の都・札幌での憧れのSingle-Lifeを楽しんでいます。朝は7:30に目覚しが鳴るも、しばらくBedから出れず、7:45になってやっとはい出してシャワーを浴び、冷たい牛乳をイッキ飲みして8:28頃慌てて出かけるという学生時代と変わらない朝です。病院は歩いて８分のところにあり、通勤は便利です。勤務時間は8:45～17:15ですが、後始末やカルテ整理、施設認可関係に追われ、帰宅はいつも６時半頃。帰りはだいたい、上司のＰＴ（男性・27歳・独身）が車で家まで送り届けてくれる（たまぁーに食事に連れてってくれますが……）健全な毎日で、ススキノなんてわかんなぁーい!!

とまぁ、低血圧の朝と、上司の「早起きできない奴は嫁になんかいけないゾ！」の言葉と闘っています。以上、札幌から近況報告いたします。さようなら。

千葉恭子（所属：青森市民病院）

菅原先生は、私達６期生に、“一緒に医療短大を卒業する”と入学当時からおっしゃっていましたので、失礼ですがなんだか本当に同じ卒業生のように親近感を持ってしまう私です。講義では二度うけたものもあり、卒業論文でも担当になってくださいました。卒業論文では、私の案は絶対二ヶ月やそこらでできるようなものではなく、次の案もなかなかでてこず、先生にうまくアドバイスしていただいてようやく方向が決まって、あとは本当におもしろく論文を書くことができました。私が楽しかった分、先生の苦労は相当だったのではないか、と思います。本当に、今日私がちゃんと卒業して就職できたのは先生のおかげです。感謝してます。先生のところへ、私はちゃんとやってるよ、と良いうわさが流れてゆくように頑張ります。

編　集　後　記

菅原先生が御退官されてから早いもので一年が過ぎようとしています。

昭和62年度からの継続事業であった「菅原教授退官記念誌」も、ようやく完成の運びとなりました。当初の発行予定を超過し、『会員からの一言』の記載内容に若干のずれを生じている会員もいらっしゃることと思いますが、何卒御容赦下さい。

巻頭には、菅原教授から私達卒業生へ「菅原教授を囲む会」で御講演頂きましたものを掲載致しました。菅原教授にはお忙しい中原稿に御加筆頂き、誠に有難うございました。

最後になりましたが、本誌編集に当たって御協力頂いた、事務局近隣の会員諸氏に厚く御礼申し上げます。

記念誌編集委員長　藤田智香子

編　集　・　発　行

編集委員長　藤田　智香子

編集委員　尾田　敦　奈良　剛　三上　雅史　勘林　秀行
楠美　有理　菊池　香　千葉　恭子

菅原教授退官記念誌

平成元年２月11日発行

（非売品）

編集・発行：弘前大学医療技術短期大学部
理学療法学科同窓会
記念誌編集委員会

〒 036　青森県弘前市本町66-1
弘前大学医療技術短期大学部
理学療法学科研究室内
☎ 0172-33-5111(内)5676

印刷・製本　㈱ 笹　軽　印　刷
青森県弘前市下白銀町11
☎ 0172-32-7530